
アコ様の秘密のメモ帳

エシナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アコ様の秘密のメモ帳

【Nコード】

N5693Z

【作者名】

エシナ

【あらすじ】

特技はピアノと家事。趣味は人間観察と脳内妄想。

そんなごく一般的な(?)音大生、秋月亜己あきづき・あこが、ひょんなことから異世界へと渡ってしまった!

アコを含め、ちょっと癖のある住人達。そんな彼女達の、異世界召喚ほのぼのゆるゆる日常ラブコメ。

……なのかも知れない。

第1話 一 奥さん、事件です【前編】

突然ですが、奥さん、事件です。

事件は、わたしの目の前で起きている。

いや、むしろ、もはや巻き込まれていると言うか、一番の被害を受けているのがわたしだと言っても過言じゃなかった。

遡ること数分前。

大学の友人達と、楽曲の課題練習と称して半ば遊び気分の合宿をした帰りのこと。

わたしを含めて4人の集団は、閑散とした公共バスの一番後ろの長い席と、ひとつ前の2人掛けの席を陣取って、女子らしくとりとめのない雑談に花を咲かせていた。

古臭いバスが走るのは山道で、ぐねぐねとうねるヘアピンカーブの坂道。申し訳程度のガードレールが敷かれた道路の下は崖で、くすんだ窓から見下ろすと、沢みたいなのが流れてる。

山道だこういう場所は珍しくもないんだろうけれど、普段は滅多に目にするこのないささやかな光景に、なかなか綺麗なものだなあ……なんて。ゆったり走行とはいえカーブの激しさに車酔いを訴え始めた友達の背中を擦りながら、感慨に耽ったりなんてしていた。

そんな時だった。遠くから、もの凄くエンジンをふかす車の音が聞こえてきたのは。

爆発するような音に、耳が痛くなる。

山道によく出没するっていう走り屋さんっていう輩か。わたしと同じように不快そうに顔を顰めたり、耳を押さえたりしていた友人達が、音と一緒に凄いスピードで正面から迫ってきた白い車を見た。

その瞬間まではきつと、あたしも、友人達も、不快に思いながらも滅多に見られない未知の人種との遭遇に、好奇心が膨らんでいたと思う。

けれど、次の瞬間には、状況も心境も一変していた。

時速何キロ出していたのか判らないスピードで、バスの横をすり抜けて行く白い車。

対向車も何も居ないような状況だったら、きつとカーブを曲がりきって、そのまま走り去って行ったんだろうけど……生憎の急カーブなうえ、対向車は車体の長いバスだ。

ぶつかる、って。バスの運転手さんもそう思っただろう。

バスの運転手さんは、定年間近みたいな皺を刻んだ落ち着いた顔をしてるくせに、想像も出来ないような手さばきでハンドルを右に切った。

むしろ、年季の為せる業だったのかも知れない。

衝突するとしたら一番後ろの右寄りに座っていたわたし達の辺りだった筈で、怪我じゃ済まなかったと思う。だから、運転席から対向車側の切り立った壁に突っ込むようにして、身体を張ってまでわたし達を守ってくれた運転手さんは、賞賛されるべきだ。

白い暴走車は驚いたのか少しふらつきながらも、バスにも壁にも衝突することなく坂道を下って行く。

友人達も驚いたし悲鳴も上げたけれど、大した怪我もなくて幸いなことだった。

問題はわたしだ。

わたしが座っていたのは、一番後ろの席の一番左端。要するに、乗降口の一番近くで、前の座席が無いのでとっさに捕まりようもなく。

ハンドルを切ってガードレールにぶつかった衝撃で壊れて開いてしまった後ろの乗降口から、わたしの身体は、ガードレールを飛び

越して崖側へと放り出されていた。

バスの車体が、目を見開いて悲痛な面持ちでわたしを見ている友人達が、ずいぶんゆっくりと遠ざかっていく。

ああ、バスごと落ちなくて良かったね。

運転手さんも無事そうだったけど、怪我してたみたいだから心配。あの暴走車は……ナンバー覚えたから、今度見掛けたらあの開ききったマフラーに限界まで角砂糖詰め込んでやる。

——内心でそんな誓いを立てながら落下して、今に至るという訳なんです、奥さん。

崖下は砂利と、ささやかな沢だった。

結構高い位置から落ちてるけれど、運良く沢に落ちたら、もしかしたら助かるかな。

助かったとしても……果たして、この両腕は無事でいられるだろうか。

わたしの名前は秋月亜己。^{アキツキ・アコ}

音大の2年生で、専攻はピアノ。

こんな紹介をするといつも可哀想な目で見られるから、一緒にバスに乗ってた友達くらいにしか言っていないけれど。物心つく前に両親が亡くなったわたしは、唯一の肉親でピアニストだったおばあちゃんに、ピアノを教わりながら育てられた。

そのおばあちゃんも、大学に入っすぐの頃に亡くなって。

わたしに残されたのは、少しの財産と、おばあちゃんから教わった沢山のことだけ。

要するに、正真正銘、天涯孤独の身というやつだ。

だから、教わった沢山のことを表現できるこの両腕は、わたしの

唯一で一番の宝物。

もうすぐコンクールのための校内選考の時期で、そのために合宿までして練習したのに……こんな事になるなんて。

死にたくないなあ。

どんどん背中に迫ってくる地面の気配を感じながら、心底そう思う。

もっと突き詰めたい曲もたくさんあった。

おばあちゃんみたいなのピアニストになるのが夢だった。

きらり、一瞬だけ空中で輝いて見えた水滴は、わたしの涙だったかも知れない。

わたしはゆっくりと目を閉じて……そのまま、意識を手放した。

—*—*—*—*—*—*—

ぺちぺち。

控え目に、わたしの頬を何かが叩く。

おぼろげな意識の中でそう認識して、わたしは、ゆっくりと瞼を開いた。

「お、何だ。生きてんじゃねえか」

すぐ近くから声が降ってくる。

仰向けになっているらしいわたしの視界に映りこむ、鮮やかな緋色。ぼんやりし過ぎていて、それが何なのかは判らなかった。

……まさか。

だるい腕を持ち上げて、目元に触れる。

腕が動くっていうことは、腕は無事っていうことか。そして、わたしは助かったのか。

内心でそのことに酷く安心すると共に、目元の存在が無いことに気付いた。

「……めがね」

お礼も何もなく目覚めて第一声がそれってというのは、自分でも酷く滑稽に思える。

けれど、わたしは酷い近眼で、めがねが無いと日常生活もままならない。人生の先も見えない。両腕の次の次くらいには、大切なものだ。

眩きが聞こえていたのか。ぼんやりとした緋色が微かに動いて、わたしの目元にそれを掛け直してくれる。落ちた時に無くなったりしてなくて良かった。

これでようやく視界がはっきりして、緋色の正体が判る。

緋色は、人の髪。よく日焼けしていて野性的な魅力のある青年が、わたしを覗き込んでいた。

明らかに日本人とは違う彫りの深さと精悍さに少し驚く。

「生きてて良かったなあ。死んでたら面倒くせえから、そのまま川に流しちまおうかと思ってたけど」

にかっつ冗談っぽく笑って、青年が言った。

そうか、運良く沢に落ちて助かったんだ。身体がずぶ濡れだから、そのまま少し流されたんだろう。

ということは、目の前の赤毛の青年Aは、森の人か何かってことか。

………

……

……そんなばかな。

ぱっちりと覚醒して、わたしは勢い良く身体を起こした。

わたしの石頭が顎に衝突しそうになった青年Aが「うおっ」なんて声を上げながら焦って避けたけれど、そんなこと構っていられない。

身体ごと首を巡らせて周囲を確認する。

憎いくらい青くて広い空に、沢なんて規模じゃない、明らかな川。そのすぐ傍……広い河道らしき場所で、挙動不審なわたしの動向を根気良く見守る、外国の方らしき赤毛の青年A。

砂利の地面も、紅葉し始めていた群生する木々も、うねったヘアピンカーブの道路も。

落ちた場所の名残なんて欠片もない、ずり落ちそうなめがねを隔てた視界に映る風景。

……落ち着け、落ち着くんだ亜己。

命はあるし腕も無事。OK把握、幸運だったね！

次に確認すべきは現状だ。

わたしはくると青年Aの方を向いて、ずり落ちそうなめがねを直して正座する。

オレンジ色の綺麗な目と視線が合って、その持ち主である青年Aは、何か言いたそうなわたしを前に、不良座りのまま促すように首を傾げた。

精悍なくせしてその所作がちよっと可愛い、なんて思ったけれど、それは頭の隅に追いやる。

まさか流されるまま海を渡って国外へ行ってしまった、なんて事は有り得ないだろうし、青年Aはわたしが理解できる言葉を喋っていた。国内の何処かではある筈だ。

「取り乱して申し訳ありませんでした。助けていただいて、ありがとうございます」

「おう、気にすんな。俺はたまたま通り掛かったただけだ。運が良かったんだな」

「あの、それで……重ね重ねお手数をお掛けして申し訳ないのですが。ここは一体何処でしょうか」

「アルス・ノーヴァ城下の外れの川原だな」

……何処だって？

これまでの人生で培った、豊富とは言えない知識という知識を総動員してその地名を探すけれど、わたしの脳の回答は「該当する項目は見付かりません」の一点張り。

少なくとも国境を越えてる？ 不法入国だなんて冗談じゃない。

「それって何処の国でしょうかね」

「アルス・ノーヴァが国名だろ？ 知らないのか？ お前こそ何処から流されてきたんだよ」

「日本です」

「は？」

「日本。ニッポン。ジャパーン！ サムライ、ニンジャ、クノイチ！！ マニアククそうな顔してるし知ってますよね！？」

「おっ前、初対面の相手に大概失礼だな……知らねえよ」

いよいよ青年Aの襟首を掴んでまくし立てるわたしに、それでも彼は答えてくれた。

そんな答えなんて、欲しくなかったけれど。

やばい、泣きそうだ。

青年の襟首を掴んだまま、わたしは俯く。

狼狽した様子の青年は、濡れたわたしの頭をそつと撫でてくれた。

「俺が休暇中に使ってる小屋が近くにあるから。地図でも見りゃあ、落ち着いて場所確認できるだろ。とりあえずそのまんまじゃ何だし、来いよ。な？」

震えながら小さく頷けば、青年はぽんぽんと安心させるように頭の手を動かした。少しだけ、肩の力が抜ける。

わたしは彼に促されるまま立ち上がって、ふらふらと後ろを付いて行った。

—*—*—*—*—*—

青年の言うところの小屋は、本当にすぐ近くにあった。

木造で小さく、中は六畳くらいの広さ。けれど、生活に必要そうなひととおりの物は揃っているようで……壁の各所に吊るされているそのどれもが馴染みの無いもので、一層の不安が募る。

青年はベッドの上に放られていた羊皮紙のような古い紙を拾い上げると、丸い木製テーブルの傍らの椅子を勧めてくれた。

背もたれの無いそれにゆっくりと腰を降ろす。

と、頭の上に何か柔らかいものを放られた。

タオルだ。フェイスタオルくらいの大きさの。

「見てて居たたまれなくなるから、とりあえずそれ被ってろ」

気遣いにお礼を言ってから、テーブルの上に広げられた羊皮紙を覗き込む。

見慣れない形の地形。描いた国が違うからとか、そういう問題ではないようだ。母国らしき島国の姿らしきものは何処にも無かった。

「これは、この国の地図ですか？」

「世界地図だ」

もう嫌な予感しかなかったけれど、短いその答えに肩を落とす。

「……無いのか？ どういうこった」

青年の目が訝しげに眇められた。

どういうこった、なんて、わたしの方が聞きたい。そもそもこんな彫りの深い人と言葉が通じている時点で、色々とおかしいのに。

けれどこの人は、見知らぬわたしに親切にしてくれている。どう思われるかは置いておくとして、ひとまず、自分の現状をありのままに話してみようか。

ちらりと被せられたタオルの隙間から伺い見れば、彼は何か考
え込むような仕草をしながらわたしを見ている。

きゅ、っと、わたしは膝の上に置いた拳に力を込めた。

「あの。わたしの現状を、ありのままお話しします。とりあえず、
聞いて貰えませんか」

「……話してみろ」

青年はテーブルを挟んでわたしの正面……ベッドの上に腰掛けて、
改めてわたしを見据える。

ひとつひとつ。自分自身も確認するように、わたしは現状を言葉
にして提示した。

友人達とバスに乗っていて、思わぬ事故に遭遇してしまったこと。
その際にわたしはバスから放り出されて、崖の下へと転落したこ
と。

落下中に意識を失って、意識を取り戻したら先程のような状況で
あったこと。

短いけれど、それが真実で、そうとしか伝えようが無い。

話し終えて再び彼の様子を伺うと……彼は何処か遠くを眺めるよ
うな……あからさまに可哀想なものを見る目でわたしを見ていた。

「失敬な。頭なんて打ってないわよ。多分……」

「あ、ああ、そうか……あれだ、バスってのは何だ」

「沢山の人を乗せて走る自動車」

「ジドウシャ？ 馬車じゃなくてか」

「馬車なんて地球のどこ探してもあんまり走ってないわよ」

「……チキユウ？」

「あーもう、何なの！ 本当もう嫌！ 地球って言ったら母星のこ
とに決まってるでしょ！ 太陽系の惑星！！ 人間とか宇宙人とか
色々なもんが住んでるの！！」

興奮するわたしを前に困ったように後頭部を掻いて、青年は肩を

竦める。

わたしは歪んだ表情を隠すように、両手で顔を覆って俯いた。

「……わたし、嘘なんて言っていない」

隠したつもりだったけれど、吐き出したその声の震えは伝わってしまっていただろう。

「しかし、あれだな。お前の話聞いていると、別の国ってより……別の世界にでも来ちゃったみたいだな？」

確かにその通りで、わたしも、少し前からその結論に行き着いていた。

けれど、そんなの認めたくない。

そう思っただけで必死に、青年の言葉の中からわたしの記憶のどの部分でも良いから、一致する言葉が出てきてくれることを期待していたのに……彼は、期待には応えてくれなかった。

ふっ、と、息を吐き出す音が聞こえる。

取り乱すわたしに、彼は呆れただろうか。

「お前、どうしたい？」

間近から声が聞こえた気がして、わたしは顔を覆っていた手をそっと外した。予想よりも近くに真摯な彼の顔が寄せられていて、少し驚く。

「一応、観察眼はあるからな。お前が俺を憚ろうって訳じゃないのは判るつもりだ。」

別の世界から来たなんて聞いたことも無いが、お前が来たってんなら可能性が無い訳じゃないんだろう。だったら、帰る方法も然りだが、方法は判らねえ。手掛かりもだ。

そんな状況で、お前は どうする？ 帰る方法を探すか？ それとも諦めて何処かに身を寄せるか？ 後者なら俺は口添えくらいはしてやれるが、前者なら、悪いが付き合っただけでやることは出来ねえ」

真剣に、わたしのことを考えているのが判る声。表情。

ぼろぼろの顔が恥ずかしくなって、わたしは慌てて目がねを外してレンズに付いてしまった涙をタオルで拭い、ついでに顔の目元も

拭う。

青年が落ち着いて話してくれているお陰で、わたしも随分、落ち着いてきた。

めがねを掛け直しながらじつくりと考えてみる。

来てしまったものは、もうどうしようもない。

死にたくないって思った。生きてた。それはやっぱり喜ぶべきことだ。

帰る方法が判らない以上は下手に動けないけれど、ゆっくりでも良いから、出来れば探しに行きたい。

先刻見せて貰った世界地図で、この国の位置は確認した。国土は世界地図で見えておよそ四分の一ほど。世界がどのくらいの面積なのかは判らないけれど、自分の世界と同等であると仮定して、巨大過ぎて国内を探し回るだけでも一苦勞。

そのうえ、この国が、世界がどんな場所なのか、わたしには今のところ全く判らない。

判ったのは、目の前のこの青年が良い人だってことくらいだ。

必要なのは、まず情報と。

探しに行くにしても何にしても、先立つもの……お金だ。

恐らくわたしは無一文状態というやつだろう。

まさかいきなりお金をたかる訳にもいかない。

頼るとしたら、そう——働き口。

働きながら情報収集。それがやるべきことで、唯一、出来ることのように思う。

考え込むこと十数秒。

目の前の綺麗なオレンジを覗き返して、わたしは、決意を口にする。

「先生」

「せ……？　おう」

「とりあえず、自活できるようになりたいです」

面食らったのか、テーブルに肘をついてわたしを覗き込んでいた青年の顔が、支えていた手からずり落ちた。

身を引いてベッドに座り直して、彼は表情を崩す。

「肝が据われれば切り替えが早いもんだな」

「うじうじ引き摺るの、性に合わないんで。で、働き口、何とかありませんか？ 出来れば住み込みとかで」

「そうだな……」

青年は考え込むように視線を巡らせて……ややあって思い当たったのだろう。表情を明るくして、わたしに向き直った。

「城で、騎士棟付きのメイドを募集してた。身元不明でも俺が口添えしたら何とかなるだろ。そんなくらいなら手伝ってやれそうだ」

騎士。メイド。何かとファンタジーな単語を拾い上げながら、わたしは深々と頭を下げる。

いやメイドは自分の世界にも居たか……まさかあの手の制服を着ることになるのだろうか。文句は言っていられないけれど。

「本当、色々お世話になって申し訳ないです」

「何も判らん状態だろうからな。これも何かの縁だし気にすんなよ」
ありがた過ぎる言葉。青年はそう言いながら立ち上がって、あと、何かに気付いたかのようにわたしへと向き直った。

「シュリだ。お前は？」

「え？」

「名前だよ」

思わず聞き返してしまって、申し訳なく思う。そういえばこれだけお世話になって、名乗ってすらいなかった。

「秋月亜己です」

「アキヅキ？」

「えっと……亜己。名前は、亜己」

「アコか。呼び易くて良かった」

最初の時みたいに関角を持ち上げて、青年は……シュリさんは笑う。少年っぽいその笑顔が、少しだけ、わたしの心をざわつかせた。

「ま、とりあえずお前着替えろよ。明日にはここ出て城に戻るから、その変な服乾かしとけ。ここには俺の服しかねえから」

言われて外を見ると、すっかり夕刻。今日はもう休むということか。

それにしても変な服って。チュニツクに、スカートに……一般的な女子の服だと思うんだけど。世界が違えば服装も違うのは、まあ当然か。シュリさんも何と言うか、簡素だけれど、友達の好きなRPGゲームの登場人物みたいな服装をしているし。

シュリさんは柵からシャツを一枚取り出して、テーブルの上に放り投げた。これを着ろということか。

丈はおしりまですっぽり隠れるほどあるけれど、襟元が開いていて色々見えそうだ。留めれば何とかなるか……体格差が憎い。

「あー、不用意に別の世界から来たとか言うなよ。身元不明ってことにして上手く立ち回れ。お前、年の割には何かと達観してるみたいだから、何とかなんだろう。」

あと、身元不明でも召し抱えて貰えるとは思うが、それなりの保護者か後見人が要るんだ。お前の場合未成年だから、とりあえず俺が保護者ってことでいいな」

「何かとありがとうございます」

何か片付け的な作業をしながら、シュリさんは色々必要なことを説明してくれた。

言い方が色々引っ掛かるけれど、実年齢より若く見られるのはいいものこと。冬生まれなので一応あと三ヶ月ほどで成人とはいえ、未成年には変わりない。

と。そんなことを考えていると、簡単過ぎる片付けが終わったの

か、シュリさんがベッドに腰を降ろし直した。

手に持った大きなシャツと彼を、思わず交互に見る。

「あの」

「何だ？」

「せめて後ろを向くとか、そのくらいの配慮は必要ではないかと」
わたしはこれから着替えるのだ。いくら何でも男性の目の前で生
着替えはちよつと。

「あー、悪い。お前マせてんのな。いくらお子様でも氣い回さな過
ぎたわ」

あっけらかんと笑うシュリさんの姿に、わたしの中の本能が、何
かを確信する。

これは、あれだ。しかし発動する前に、色々確認しなければなる
まい。

シャツをテーブルの上に放り出し、ゆらりと立ち上がって、わた
しは彼を見る。

「この世界で成人は何歳ですか」

「18だな」

「……わたしが、何歳に見えますか」

「……12位だろ？」

少し空いた間に、それでも実際考えているのより上に答えてくれ
ていることが判る。

カクン、と。

立ったまま、糸の切れた操り人形みたいにだらりと項垂れたわた
しに、シュリさんは首を傾げて困惑した視線を向けてきた。

秋月亜己、19歳。

音大の2年生、専攻はピアノ。

自分で言いたくなんてないけど、童顔でめがねっ子。声も高めで

少し子供っぽい。

……身長は149cm。

せめて150cm欲しかったなんていうささやかな願望は、同じ悩みを抱える人にしか判るまい。

そして彼らが災いして、元の世界でも中学生にしか見えないとかちよっと遅い時間に歩いてると補導されるとか、散々言われたし経験した。

けれど、人の最大のコンプレックスに対して、言うに事欠いて12歳？

制裁決定。

わたしの髪や服の水分を吸って重たくなったタオルを外し、ちよつとどつきりした気持ちごと、全力でシュリさんに叩き返す。

べしゃっ、と小気味の良い音を立てて、タオルは狙い通り彼の顔面にクリーンヒットした。

困惑したらしい彼は「そんな怒んなくてもあっち向いてるって」なあって言いかけて、言葉を飲み込む。わたしの殺気に気付いたんだろう。流石、ファンタジーな世界の住人デスネ。

わたしは殺気をたぎらせたまま彼の目の前に進み出て、ガッ、と両手で彼の頭を鷲掴みにした。

「後見人をお願いします」

「あ？」

「後見人をお願いしますすつつつてんのよ！！ 秋月亜己！ 年は1

9！ ヨロシクネ！！」

「じゅうく……はあ！？」

ホホ、随分と素っ頓狂な声を上げやがる。

わたしはぎりぎり両手に力を込めて、見開かれた彼のオレンジの瞳に自分の視線を据えて間近から殺気を送り込み続けた。めがねを掛けた状態のわたしに、眼力で勝てると思うな。いいか、先に視

線を逸らした方が負けだ。

「おつま……それは流石に嘘だろ！」

「嘘ならもっとましなの吐くわよ！　ちなみにあと三ヶ月でハタチよ！」

「ハタ……ってお前俺とタメかよ！？　その脳内設定は無理あるだろ！」

「タメだと！？　ホッホホ、もう敬語も敬称も使ってなどやらぬわ！　　というか脳内設定なものか！！　身長のある奴にわたしの気持ち

ちが判るかあああああー！！！！」
ガンッ、と頭突きする勢いで顔を近づけてやると、いたたまれなくな

ったのかシュリは視線を逸らす。
眼力勝負はわたしの勝ちのようだが、その白々しい顔。絶対に信じてないわね。

こうなったら、最終兵器を投入するしかあるまい。

大概の奴はこれで納得してオチる。

わたしは彼が逃げないように、彼の膝の上に片足を乗っけて勢い良くチュニックを脱ぎ捨てた。

シュリはぎょつとして身を引こうとする。その顔は鮮やかな髪に負けないくらい真っ赤だ。

それもそうだろう。チュニックの下は裸……では流石じゃなくて、ちゃんと下着の上からキャミソールを着ているけれど、それでも判る筈だ。

縦に伸びなかったぶん育った、このFカップの胸がッ！！

シュリの胸倉を掴んでぐいと目の前に晒してやる。普段は一般人相手にここまではしないけれど、ここでこの男が信じてくれなかったら、今後この世界でのわたしの沽券に関わる。喰らうがいい！

「これを見てもまだわたしが12歳だと申すのか！　実物よ！　パットなんて入っちゃいけないわよ！　触ってみなさいよこん畜生！！」

「わっ、わ、判った！　信じる！　信じるから服を着ろおおおおお~~~~~！！」

必死で逃げようとするシュリの悲鳴が、闇の落ち始めた空へと吸い込まれていく。

こうしてわたしは、保護者ではなく後見人として、彼を獲得することに成功した。

第1話 一 奥さん、事件です 【後編】

「大変失礼を致しました。ほんとまじごめんなさい。後生ですので川にリリースとかしないでください」

「捨てねえって。いや……まあ、何だ。俺も悪かった」

怒りの勢いに任せて初対面のうえにお世話になりまくった異界の住人の上に乗った拳句胸倉を掴んで揺さぶり倒して脅迫した後、着替えをしたところでようやく正気に戻ったわたしは、冷たい床の上でシュリに土下座をしていた。

もう少しお世話になりたいのにここで捨てられても困る……なんて思っていたけれど、どうやらその心配はなさそう。

年齢の件も恐らく何とか信じてくれたようだし、改めて、彼が良人なんだということを思い知る。「人生の中で一番信じられん出来事だ」って顔に書いてあったけれど。

ちら、と、少し身体を起こして彼を伺うと、未だ赤い顔を不自然に逸らされた。

やっぱり、ちょっとやりすぎたか。今後目を合わせてくれなかったらどうしよう。

「ほら、怒ってねえから、床なんか座ってんなよ。腹は減ってねえか？」

シュリに腕を引かれて立ち上がらせられる。間近に立ってみるとよく判るけれど、彼は背が高かった。180cm以上はありそうな……憎い。長身の奴等が憎い。

と、再び憎悪の蓋が開きそうになっていると、わたしのお腹が「きゅう」と切ない悲鳴を上げた。

空いている方のお腹を押さえる。

どのくらい気を失っていたかは判らないけれど、バスに乗り込んだのが朝で、寝坊して朝食を食べ損ねていたので、丸一日近く何も

食べていない。お腹も空く訳だ。

微かに目を見開いたシュリが笑いを噛み殺しているのが判る。いつそ笑い飛ばしてくれた方が恥ずかしくなくてありがたかったのに……悔しいので下から睨みつけてやった。

「大したもんは無いが、そこ座れ」

促されるままベッドに腰を降ろすと、シュリが、麻袋の中からパンと干し肉と、紅茶みたいな色の飲み物を出してくれる。白っぽくて柔らかそうなパン。

彼は自分の分も用意してからさっきまでわたしが座っていた丸い木の椅子に腰掛けると、どうぞ、と出してくれたものを勧めてきた。「……いただきます」

何となく習慣で、手を合わせて一礼してからパンを手取る。見た目どおりふわっふわで、一口噛り付くとほんのりとした甘みと共にじわりと口の中へ溶けていった。嗚呼、幸せ。

噛り付きながら幸せに浸っていると、何故か頭を撫でられる。

「いや、あんまり美味そうに食うもんだから」

なに、と目で問うと、シュリはそう答えた。だからと言って、頭を撫でる理由にはならないと思う。

「お子様扱い禁止」

「ははっ、よく噛んで食えよ」

わたしはパンに噛り付きながら思い切り殺気を送ってやったけれど、もう耐性が付いたのか、シュリは笑ってそう言うだけだった。

……悔しいけれど、食べものを与えて貰った手前、あまり強氣に出られない。

食事を摂りながら、この国について色々と教えて貰った。食事中以外の会話から拾った情報も交えて、まとめてみる。

国名は“アルス・ノーヴァ”。

世界五大国のひとつで、世界のおよそ四分の一国土を保有する最大にして最古の国。代々、女性の王族により統治されていて、今代の女王の名はオルガ。

五大国は和平条約を結んでいて世界は概ね平和が保たれているけれど、各国は国力の一として騎士隊などの兵力を保有している。この国も然りで、シュリはその騎士隊に所属しているのだそうだ。

現在は無理矢理取られた休暇中で、この小屋へ身を寄せて鍛錬をしていたらしい。休暇なのにひとりで鍛錬をするっていうのもどうなのだろう、と思ったけれど、色々と深い事情があるのかも知れないので突っ込むべきではないだろう。そのお陰で助かったことであるし。

本当にファンタジーな世界なのだな、と思って魔法なんてものは無いのかどうか尋ねてみると、やはりあるとのこと。

けれど、魔法の力を持つ者はとても希少で国内にも数名しかいないそうだ。

明日は起きてすぐ城へ向け出発。

色々と手続きをして、その後配属先の先輩に付いて仕事をすることになるだろうから、手続きするところまでは一緒に居てやれる。

シュリがそんなことを話すのを聞きながら、わたしはいつの間にか意識を手放していた。

助けて貰って、お腹もいっぱいになって、安心したせいだろう。

子供扱い禁止とか言っておいて子供っぽいな、と、我ながら思った。

眠りの淵で、何かの夢を見る。

おばあちゃんが出てくる幸せな夢だった気がするけれど、起きた後、その内容をはっきりと思い出すことは出来なかった。

—*—*—*—*—*—

ゆっくりと、瞼を持ち上げる。

まず視界に入ったのは、あまり柔らかいとはいえない布地……枕。身体を起こして周囲に視線を巡らせるけれど、ぼやけ過ぎていてよく見えなかった。適当に枕付近を手で探してみると、無事にめがねを発見。

めがねを掛けた視界に映ったのは、見慣れた寂しげな自分の部屋、では無かった。

木製の狭い小屋。壁の各所に吊るされた、見慣れない生活用品類。そういえば別の世界っぽいところへ来てしまったのだということを、嫌でも思い出す。

それにしても。

ベッドの淵に座ったまま眠ってしまったのに、きちんと横になっていて、めがねも外され畳まれていた。

薄いブランケットまで掛けられて……シュリが面倒を見てくれたのか。彼が眠る予定のベッドだっただろうに、申し訳ないうえに図々しいことをしてしまったと反省する。

彼は、室内には居なかった。

わたしはベッドから降りて、昨晚干しておいた自分の服が乾いていることを確認し、手早く着替えてしまう。

それから、微かな風きり音が気になって、小屋の外へ出てみることにした。

何となく、伺うようにゆっくりと扉を開ける。

視界に入ったのは、銀色の閃きだった。

(うわ……)

あまりの勢いに驚いて一瞬だけ肩をすくめ、それから、見入る。風を切るのは銀の剣。剣を従えるのは、鮮やかな緋色の主。

何かの型なのだろうか、演舞のように剣を操るその動きは何処か現実離れしていて、凜然としていて。男の人に対して綺麗だなんて思ったのは、初めてだ。

やがて、剣を正面に向けて真っすぐに突きつけたところで、ぴたりとシュリの動きが止まる。

ゆらり。

標的を射るかのように鋭く細められた、凄艶せいえんなオレンジの瞳を向けられて、鳥肌が立った。

けれど、それはほんの一瞬。彼は口角を持ち上げて笑い、表情と体勢を崩す。

昨日も見ただ人好きのする笑みに、どこことなく安心感を覚えた。

「よ、起きたか」

「おはよう。ベッド取っちゃってごめんなさい」

「疲れてたんだろ、気にすんな。それより、もう良い時間だ。起きたんなら早速出発するぞ」

腰に佩いた鞘に刀身の長い剣を納めながら、シュリが近付いてくる。

どのくらいの間鍛錬をしていたのかは判らないけれど、彼は、息も上がっていないければ汗のひとつも掻いていなかった。

そこで待ってろ、と言われて小屋の出入り口付近で待てば、シュリは小屋の中へ入り、さほど大きくもない麻袋をひとつだけ持ってきて出てくる。わたしは当然ながら準備するものなんて何も無い。簡単な旅支度だ。

小屋は広い河道の端、河川敷の堤防のような形の、ゆるやかな丘になっている部分の手前にある。

丘を登りきると、視界に城下町らしき風景が広がっていた。

「ふおお」

思わず感嘆の声が漏れる。

白と青の、西洋の古城写真とかにありそうな巨大なお城。その周囲に密集して、遠ざかるにつれて徐々にまばらになっていく色とりどりの建物たち。

「おっ前、感動するんならもっと可愛げのある声出せよ」

「放っておいて頂きたい。ね、あのお城に行くの？」

「ああ」

シュリにとっては当然ながら見慣れた風景なのだろう。城へ行くのが楽しみになってきてそわそわしているわたしに、少し呆れている。

そうして彼は歩き出したので、わたしはその後にくっついて行っただ。

—*—*—*—*—*—

およそ2時間くらいは歩いただろうか。

足が疲労を訴え始めた頃に、白と青の王城へと、わたし達は辿り着いた。

疲労も忘れて、口を開けて巨大なそれを見上げる。遠くから見ても綺麗で凄そうだなと思ってはいたけれど、近くで見ると、それは正に圧巻だった。巨大すぎて、見上げ続けたら首が痛くなりそう。シュリが小さく吹き出したのが判った。おのぼりさんで悪かったわね。

慌てて口を閉じて彼を睨み付け、城門へと歩を進めるその後ろへと付いていく。

降りている跳ね橋の先にある城門前には、騎士らしき門番が2人、両端に立っていた。

槍のような武器を持っていて、何となく、わたしはシュリの服の端を掴む。

よっ、とシュリが軽く手を挙げて門番に声を掛けると、門番は呆然としているかのような驚いたかのような微妙な表情を浮かべ……はっとして佇まいを正して、シュリに向かって頭を下げた。

そのまま真っすぐに進んで、城の中へと入る。

城内も白と青を基調に彩られていて、2時間前から感動しっ放しだというのに、わたしの脳は未だ感動し足りないらしかった。

けれど、それより何よりも。

城内で遭遇する人という人がシュリに向かって一礼していることに、わたしは驚いていた。

騎士らしき若者、メイドさんらしき女性、書類を片手に忙しく奔走する中年まで。

当のシュリは、門番にしたように軽く手を挙げるだけ。

「……シュリって偉いの？」

「んーまあ、そこそこな」

訝しげに下から問うと、彼はにいと笑って見下ろしてくる。と、腰に剣を穿いた、どことなくシュリと似たような服装の男が、小走りで近寄ってきた。

「隊長、お帰りなさい」

「おう、変わりないか？」

……幻聴じゃなければ、隊長って聞こえた気がするけれど。

恐らく騎士であろうその男性は、城内や騎士隊の状況などについてを、シュリに対して報告する。男性の方が絶対に年上に見えるのに、シュリに対して敬語だ。

やがて報告が終わったのか話が途切れ、男性は、困惑した表情でわたしに視線を向けてきた。

わたしは慌てて頭を下げる。

「あの……そちらは？」

「ああ、川で拾った」

「拾っ……」

シュリの端的かつ短い答えに、男性は言葉を詰まらせた。

まあ、間違っただけではないけれど。いくら何でも説明を端折り過ぎではなからうか。

「行くところ無いらしいんだ。騎士棟の女中募集してただろ、そこに入れようと思う。悪いがお前、ジークに話通しといってくれるか」

「は……はっ、了解しました」

シュリの指示に対してそう言って一礼すると、騎士らしき男性はどこかへ行ってしまった。

思わず、去って行く騎士とシュリを見比べる。

「手続きの前に帰城報告しに行くから、ちょっと付き合えよ。俺より偉い奴に会えるぞ」

「俺よりって、そもそもシュリがどの辺の位置なのかがさっぱりなのですか」

「そこそこだ、そこそこ」

「そこそこってどこよ！」

適当に返すシュリに思わず突っ込みを入れながら、更に城内を奥へと、わたし達は進んでいった。

奥へと進むにつれ、廊下の人通りは少なくなってくる。

シュリが足を止めたのは、重厚感の漂う両開きの扉の前だった。

2回、彼がノックをすると、中から入室を許可する短い声が聞こえてくる。声を確認してから、シュリは扉を押し開いて入室した。

少しだけ、シュリが押さえている所為で半端に開いた扉の前で待つ。

室内から2、3会話する声が聞こえ、ややあつて、こちらへ顔を覗かせたシュリに入室を促されたので、少しだけ緊張しながら足を踏み入れた。

幾つかの書棚と机だけが置かれた、高級感漂うものの質素な部屋。執務室、という雰囲気。勝手なイメージからそう思っただけだけれど、どうやら当たっていいような気配がする。

室内の一番奥に設置された机の上には書類が積み上げられていて、座っていた男性がペンをホルダーに戻してからこちらを見た。

机と書類の室内には調和しない、厳つい雰囲気的中年男性。

けれども随分と柔和なまなざしと笑顔を、わたしへと向けている。「お前が女を連れ込んだと噂になっているから、どんな女性かと思えば。随分と可愛いお嬢さんだ」

「噂って……早過ぎだろ。どんだけ暇なんだこの奴等は」

呆れ顔でシュリが言えば、中年男性は軽く笑いを返した。

偉い人、とシュリが言っていたし、ひとまず挨拶だけはきちんとしなければならぬだろう。

「この度は、危ないところをシュリに助けていただきました。垂己と申します」

そう言って、わたしは深く腰を折って頭を下げた。ふむ、と、感心したかのような声がかかる。

「礼節を心得ているようで、素晴らしいな。私はアルノルト。この国の騎士隊の総隊長を務めている」

くすんだ銀色の目を細めて、中年男性は言った。

総隊長って……総隊長ですか。

思わず口が開きそうになるのを、必死で堪える。

「身寄りも当てもないってんで、俺が後見で、騎士棟の女中に入れようと思う。いいだろ？」

恐らくは直の上司であろう総隊長に向かって、シュリは随分と軽い口を利いた。そこそこってどこら辺よ、本当。

「ふむ、騎士棟は常に人材不足だ、お前の推挙ならば問題あるまい。

家事は得意かね？」

「はい、一通りは」

「結構、結構」

よどみなく答えたわたしに、総隊長はうんうんと満足気に頷いた。記憶にある当初からおばあちゃんとふたり暮らしだったわたしは、家事については常に手伝いながらの生活をしている。ここ1年半は一人暮らしをしていたし、それなりに出来るのは本当だ。……料理だけは、あんまり上達しなかったけれど。友人に言わせると、可も無く不可も無くなのだそうだ。

まあ、それは兎も角として。

「じゃあ、さっさと手続き済ましちまおう。行くぞ」

あまり会話という会話をしていないような気がするけれど、挨拶はもう済んだのか。シュリが言葉通りさっさと退室しようとする。わたしは少し慌てて、もう一度総隊長に向けて頭を下げた。

「あの、ありがとうございます。お世話になります」

そう言って退室するわたしに、総隊長は柔和な笑顔のまま、手を振り続けてくれる。

総隊長も良い人そうなので、わたしは少し安心した。

部屋を出るとシュリは来た通路を戻っていくので、わたしもそれに付いていく。

少し戻ったところにある通路を、今度は左に折れて。……それにしても、こうも広いと。

「これ、わたし……ひとりで放り出されたら迷子になりそう」

「ま、慣れだな。不安なら捕まってもいいぞ？」

「う、うむ。ありがとう」

にいつと悪戯っぽく笑って言ったシュリの服を、遠慮なく掴む。彼は冗談で言ったんだろうけれど、見失ってひとりになったりでもすれば、わたしにとっては死活問題だ。

意外だったのか、数度、目を瞬かせたシュリは、軽く後頭部を搔

きながら視線を正面に戻した。

「総隊長さん、良い人っぽいね」

「……ああ、まあな」

「その微妙な間が気になるんですが。えっと、今度こそ手続き？」

「だな。さっきのトコは騎士棟の一部。これから行くのは行政棟だ」

「職業ごとに区分されているのね」

「ああ、大まかには4つか。騎士棟、行政棟、司法棟、王族の棟。

あと、特殊な区画も幾つかあるが」

……特殊なのが少し気になる。

「とりあえず騎士棟について早めに把握することだな。騎士棟と、多分行政棟以外は、滅多なことでも無い限りは行かねえだろうから」

「ふむ、メモメモ……って、メモ帳も無かった」

何かと気に掛かることを書き留めておく癖のあるわたしは、常にペンとメモ帳を携帯していた。けれど、残念ながら愛用のメモ帳はバックの中。バスからは身体ひとつで放り出されたので今頃は一緒に居た友人の手にでも渡っているか。

どちらにせよ川に落ちているから、普段通り身につけていたとしても使いものにならなくなっていただろうけれど。

そう言えば。向こうでは、わたしの扱いはどうなっているのだろうか。

行方不明、ということになるのか、やっぱり。

今頃搜索されているかも知れない、なんて考えると、何だか申し訳ない気持ちになってくる。

それより。

友人に見られるくらいなら兎も角、行方不明者の遺留品だか何だかで、メモ帳の中身を開示されたりなんてしていないでしょうね……いやいや、流石にそれは無いだろう。あったら困る。帰れなくなる。

「そうか、お前、その変な服以外何も持って無えんだな」

うんうんと唸りながら考え込んでいると、シュリの声が降ってきた。

「あっちでは一般的な女子の服なの。でもそうだね、最低限の生活用品くらいは早めに欲しいな。お給料いつ出るんだろう……」

「働く前から気が早えな。まあ、その辺は考えといてやるさ」

そう言ったところで、シュリは足を止める。目的地へと着いたのだろう。

先程の総隊長の部屋とは色の違う、一回り大きな扉がそこにはあった。両開きなところと重厚感はさして変わらない。

シュリはノックをすると、返答を待たずに扉を開いた。

「お待ちしていました」

入室するなり、落ち着いた声が掛けられる。

室内は思っていたよりも広く、天井も高かった。出入り口側以外の壁は書類や本がぎっしり詰め込まれた棚で埋まっていて、幾つかの机がコの字型に並べられている。

事務室、という単語を連想させる空間。

人の姿も複数あって、皆が皆、静かながらも忙しそうにしていたけれど、声を掛けてきたのは一番奥の中央の机に着いていた青年だった。

半端に伸びた青い髪を後ろで一つに括った、シュリと同じか少し年上くらいに見える青年。

シュリとはまた正反對の、静かな魅力がある。要するに、2人とも外見が良い。

青年の前まで進み出ると、シュリは無言で差し出された2枚の書類とペンを受け取って、青年の机で何かを記入し始めた。

「業務内容は主に騎士棟の雑用です。詳しくはもうすぐ来る貴女の担当上司となる女中に説明を受けてください。部屋もその方と同室になります。何か質問は」

手元の書類に視線を走らせたまま、こちらをちらりと見もせずに、青年は言う。

必要最低限、という感じだ。既に上司の手配まで済んでいるという仕事の早さには感服したけれど、正直、説明が少なすぎて何を質問すればいいのかすら判らない。

「おい、ジーク」

困惑していると、書類を記入し終えたらしいシュリが手の甲で青年の頭を軽く叩いた。

軽く、とは言えそれなりに痛そうな音がして、青年は低く呻いて叩かれた場所を押さえる。

「説明くらい目え見てしろっての」

擦りながら溜息を吐き出した青年は、ようやく視線を上げた。

長い前髪の間隙から覗く端整な瞳は、深い藤色。彼は半眼で青年を見下ろすシュリとわたしを見て微かに訝しげな表情を作り、すぐに表情を戻して書類を受け取った。

「室長のジークベルトです。ここにサインを」

「あ、亜己です。どうぞ宜しく」

彼が書類の片方をわたし向けに差し出し、右下の空欄を指す。雇用契約書みたいなもののようなので、素直に名前を記入した。

……あれ、何でわたしは恐らく日本語ではない筈の書類を読めたのか。

ペンと書類をジークベルトさんに渡してから気付く。

言葉といい文字といい……もう良いか。追求するのやめよう……通じなければ通じないで困るし。

心の中で葛藤していると、控え目なノックの音がして誰かが入室してきた。

クラシックメイドのような格好をした女性。恐らく、わたしの上司を担当してくれる人だろう。

「メリクールさん、貴女の部下です。業務の説明や指導など、宜しくお願いします」

シュリに言われた所為か、ジークベルトさんは入室してきた女性を見ながらそう言って、すぐにわたしから受け取った書類へと視線を落とした。

メリクールさんと呼ばれた女性はこちらを見て優しげな笑顔を浮かべ、ぺこりと一礼する。わたしも同じように一礼を返した。

「さて、手続きの面で俺が面倒見てやれるのはここまです。メル、後は宜しく頼むな」

「はい」

同じ棟の人間だろうし、知り合いなのか。シュリに愛称と呼ばれたメリクールさんは、短い返事で了承を伝える。

「シュリ」

退室しようとするシュリを、わたしは呼び止めた。

佇まいを正して、真っすぐに彼を見る。

「何から何までお世話になって、本当にありがとう」

わたしは心からの感謝を込めて、腰を折って深く頭を下げた。

彼が拾ってくれなければ、わたしは今頃どうしていただろう。途方に暮れていたか、彷徨っていたか、そのまま川を流れていたか。兎に角、ろくな状況にならなかったであろうことは明白だ。

数秒、姿勢を維持してから身体を起こすと、ぼんぼん、と頭を撫でられる。

「同じ騎士棟に居るから、何か困ったら頼れよ」

視線を上げると、初めて見る柔らかい表情をこちらへ向けているシュリの顔があった。

これ以上お世話になってしまったら、本当に頭が上がりなくなるというのに。嬉しさと一緒に、申し訳なさが心の中へと広がっていく。応えようとして返したわたしの表情は、ちゃんと笑顔に見えていただろうか。

「シュリ、待ってください」

今度こそ退室しようとするシュリを、今度はジークベルトさんが呼び止めた。

ジークベルトさんの視線は、シュリが渡した書類へと落とされている。

「書類に不備があります。訂正をお願いします」

「ああ？ 必要事項は全部埋めてるだろ」

面倒そうに机の方へと戻るシュリに、ジークベルトさんは至極真面目な表情で、言った。

「アコさんの年齢の記載が間違っています。19歳は有り得ないでしょう」

わたしとシュリの動きがぴたりと止まる。

怪訝に思ったらしいジークベルトさんとメリクールさんが首を傾げた。

シュリにも脳内設定だの何だの散々言われたけれど。

この野郎、有り得ないとか言いおったか？

真面目な顔で、有り得ないとか言い切りおったのか……？

決して許されない。決して。

ぎち、ぎち。発言者の方へ顔と身体を向け、わたしは全身からゆらゆらと殺気を放出する。

わたしの静かなる怒りが空間へと満たされていくのを感じ取ったのは、びくりと一瞬だけ肩をそびやかしたシュリのみか。

そうでしょうとも。経験者である貴方ならば判るでしょう、この怒りの深さが。

ずんずんとジークベルトさんの机の前へと進み出て、ずいっと顔を近付けて、わたしは間近から殺気を送り込んでやった。

気圧されたらしいジークベルトさんは目を見開いて冷や汗を流したまま、身を引くことも出来ずに硬直する。

「書類に、不備は、ありません」

「い、いえ……しかし……」

「しかしじゃ無いわよ。記入した通りだから黙って受理しろってんのよ。信じられないってんならうおっ」

胸倉に掴みかかるうとしたところで、何者かに後ろへ身体を搔っ攫われて失敗した。

背後から片腕でわたしの胸を抱え込み、もう片方の手で今にもジークベルトさんに掴み掛かろうとしていた右腕を掴んでいるのは、シュリだ。

身長差の所為で抱え込まれると地に足が着かない。悔しい。悔しい。いいいいいいいい！！

「アコ、落ち着け、こんなトコで発動すんな」

「うるっさいわねこの長身族が！ こいつ、わたしが今まで歩んできた人生の長さを全否定しやがったのよ！ 有り得ないとか言いやがったのよ！！ 許されてはならないのよっ！！？」

「ジーク、そんな訳でその書類には真実しか記されてねえから。そのまま受理してくれ」

「は……？ いや、わ、判りました」

「メル、行くぞ」

「………？ は、はい………？」

シュリはそのまま回れ右して、さっさと出口へ向かった。後ろに、首を傾げっぱなしのメリクールさんを引き連れて。

わたしはじたばたと全力で暴れてみるけれど、シュリはびくともしない。

畜生、馬鹿にしおってからに……！！

「放しなさいよ細マツチョ！ あいつ絶対判っちゃいないわよ！

こんなところで引き下がれないのよ！ ていうか足が着かないのよ！！ 揃いも揃ってわたしの人權を侵害すんじゃないわよおおお

「おお！！」

事務室全体の視線が注がれる中、魂の叫びも虚しく、わたしは易々と部屋の外へと連行されてしまった。

ばたん。

無情にも、事務室の扉はメリクールさんの手によって静かに閉じられる。

ぶつけどころの無い怒りを抱えたまま、わたしはシュリの腕の中でがっくりと項垂れた。

「うっ、うっ……憎い、お前達が憎い……」

「大丈夫だって、ちゃんと受理されっから」

「そんな事を言ってんじゃないのよ……というか放しなさいよお」

「暴れたり逆走したりしないってんなら放してやるけどな」

「保障は出来かねるわ……」

「じゃあ駄目だ」

「ううっ、人さらいー、人でなしー……敵だ、みんな敵だあああ」

「人間き悪いこと言ってんなっての。飴買ってやるから落ち着け」

シュリは項垂れるわたしを左脇に抱えて運び、右手でよしよしと頭を撫でてくる。

飴如きでこの心の傷が癒されるものか。癒されるものかああああ。

この時のわたしは怒りと絶望感に支配されていて、怪しく光る何者かの目線になんて、気付いていなかった。

第2話 一 華麗なるへんち……隣人達 【前編】

気付いたことがある。

サイモンとトロイは親友のようだけれど、時々、トロイがサイモンを見る目が熱っぽい。

カーチスは、じゃれる振りをしてアンセルムの肩やら腰やらを艶かしい手付きで触ることがある。

食堂から出て行くグリフィスをじっと目で追っていたハイラムが、数秒後、視線を落として溜息を吐く。

今日も目撃してしまった彼らの気になる動向を、わたしはメモ帳に書き付ける。

—*—*—*—*—*—

遡ること、2日前。

「取り乱して申し訳ございませんでした。この通りですのでどうかクビだけは勘弁してください」

「クビ……？ 解雇のこと？ そ、そんなことしないから、ね！ 立ってっ！」

事務室らしき場所から、騎士棟の女中専用の宿舎にあるメリクルさんの部屋に、シユリの手によって放り込まれた後。

正氣に戻ったわたしは、上司となるメリクールさんに全力で土下座をしていた。

思えばあの青髪美形青年は、室長とか何とか言っていたので多分偉い人だ。そんな人の胸倉を掴んで喧嘩を売ろうとしていたとは……放り出されても文句を言えない。

けれど、怒り発動してからシュリに取り押さえられて部屋に連行されるまでの一部始終を見ていたメリクールさんは、しゃがみ込んで、床へとへばり付くわたしの肩をそっと掴んで起こしてくれた。

鳶色のおさげ髪。同じ色の瞳。

少し面長の彼女の顔が、にこりと笑みを浮かべる。

「あれはジークベルトさんが悪いわ。女性の年齢をきちんと確認しないであんな事を言うなんて。だから、気にしないで、ね？」

わたしは彼女を女神様かと思った。後光が差しているようにすら見える。

こんな人が上司だなんて、わたしは幸せかも知れない。

わたしは感動しながら、促されるまま立ち上がった。

「あたしはメリクールよ、メルって呼んでね。なかなかハードだけど、今日から宜しくね」

「はいっ、宜しく願います！ 亜己と申します！」

今日は諸々の説明や制服のサイズ合わせ、顔見せなどをするだけで、実際に業務に入るのは明日からとのこと。

騎士棟について、わたしはメルさんから説明を受ける。

騎士棟には6つの宿舎があり、第1〜第5宿舎までは一般騎士、第6宿舎は立場のある騎士が利用している。

宿舎は各隊毎に区分されていて、要するに、第1宿舎を利用しているのが第1部隊。全部で5つの部隊があるということだ。

各部隊はおよそ200名前後で構成されていて、そのうち第6宿舎を利用する隊長・小隊長格の人を除いても、ひとつの宿舎にはお

よそ180〜190名程度の騎士が居る。隊長格の人達を合わせれば、その数およそ千。

そんな騎士棟の掃除、洗濯、食事の後片付け手伝い、起床号令、その他細かい雑用などを、11名の女中スタッフで回していたらしい。わたしを入れても12名。メルさんの言葉通り、なかなかハードそうだった。

わたしとメルさんは、主に第5宿舎を担当することになるとのこと。

5つの部隊の中で最も若者達の集まる……要するに、一番経験の浅い下っ端部隊ということだ。ちなみに、基本的には部隊の数字が若くなるにつれて経験も実力も上になっていくらしい。

「各隊は幾つかの小隊で編成されていて、小隊長が各隊に9名。その上に隊長。5つの部隊を統括するのが、総隊長のサー・アルノルト様ね」

アルノルトという聞き覚えのある名前に、わたしは数時間前の出来事を思い出した。

厳つい、けれども穏やかな眼差しの、灰色の髪と瞳の中年男性。そんなに偉いお方だったとは。

メルさんは説明をしながら、既に準備していたという女中の制服を手渡してきた。彼女も着ている、落ち着いたクラシックメイド風の服。それにしても、本当にここの人達は仕事が早い。

サイズを合わせるというので、わたしはもそもそと着替えを始めた。

「それにしても、貴女、シュリさんの知り合いだったの？」

「知り合いというか……昨日、ちょっと危ないところを助けて頂きました。働き口探してるって相談したら、こちらを紹介してくれたんです」

「そうだったの。貴女のこと随分気に掛けているようだったから、特別な知り合いなのかしらって思ってたの」

特別……というか、特殊ではあるだろうけれど。わたしをこの部屋へと放り込んだあと何処かへ行ってしまったシュリの顔を思い浮かべる。

そういえば。

「シュリって、隊長って呼ばれてみたいなんですけど、騎士隊の隊長さんってことなんですかね」

「あら、本人は何も？」

「は、はい……」

あらあら、と、メルさんは口許を押さえて少し驚いた様子を見せる。

「5つの部隊とは別隊でね、11名の騎士で編成される“アルス・ノーヴァ親衛隊”っていう部隊があるの。国の親衛隊の名を冠するだけあって、完全に実力主義で構成されていてね。宿舎ではなく城内に個室を与えられていて、位置的にはアルノルト様の直属っていうことになってるけど、様々な権限も与えられているのよ」

とてつもなく嫌な予感がした。

予感というか、もはや確信というか。

「……えっと、要するに」

「シュリさんは、そのアルス・ノーヴァ親衛隊の首席。隊長なのよ」
さあっと血の気が引いていく。

要するにわたしは、この国一番の騎士……権限的にはナンバー2の胸倉を掴んで揺さぶって脅迫したという訳か。

……う、打ち首になったりしないでしょうね……

背中に嫌な汗が流れるのを感じながら、制服のブラウスのボタンを掛けていく、と。

ぐいぐい。

いくら引っ張っても届きそうもない。

仕方がない。背や肩幅に合わせて服を選ぶと、大概こうなる。

「メルさん」

「ん？」

「ブラウスのボタンが閉まりません……」

あらあら、と、メルさんは先程よりも大きく目を見開いてわたしの胸元を見た。

胸元の開いたロングタイプのワンピースは丈も含め丁度良いサイズだけれど、中に着るブラウスの第二ボタンがどう頑張っても掛けられない。

メルさんは自分の胸とわたしの胸をまじまじと見比べ……わたしの胸に、下からそっと手を添えた。

「まあまあ」

彼女は微妙に楽しそうな表情で、私の胸を持ち上げたり揺らしたりする。

「随分と立派なものをお持ちで。正直、わたしも最初は貴女のこと未成年だと思っていたけど、これで未成年は流石に無理があるわねえ」

「は、はあ……あの、もう少しサイズの大きなものは」

「大丈夫よ、他の丈はぴったりだから、明日までには直してあげるわ」

「お手数お掛けします」

メルさんは未だわたしの胸を弄んだままだ。触ってそんなに面白いものなのだろうか。

コンコン。

丁度その時、部屋の扉をノックする音が聞こえてきた。

「はい、どうぞ」

メルさんがほぼ無意識的に返事をする。

いえ、あの、ブラウスの前ががつり開いているうえにメルさんに胸触られてるままなのですが。

なんて思ったけれど、遅かった。

ガチャリと扉が開かれ、開いた状態のまま、部屋を訪れた人物が硬直する。

野生的な緋色の髪と、同じくらい真っ赤になった顔。部屋を訪れたのは、よりにもよってシュリだった。

下から胸を揺らす手付きは止めないまま、メルさんが「しまった」というような表情を作る。そこまで夢中になっていたというのか。

シュリは硬直していた視線を不自然に横に泳がせて、ずりずりと後退し始めた。

「わ、悪い。邪魔はしねえから、終わったら呼んでくれ、ここに居るから」

ぱたん。

扉が閉じられる。

終わったらって、何が。

「ご、ごめんなさいね。つい夢中に……」

「い、いえ……」

ほほほ、と、ばつが悪そうに笑うメルさんを前に、わたしは素早く元の服へと着替えた。

それを確認してから、メルさんは慌てて扉へと駆け寄り、開く。

「大変失礼致しました」

「お、おう、もう良いのか……？」

「ええ、大丈夫です。何かありましたか？」

「ああ、ちょっと、アコ借りて行っても大丈夫か？」

「一通りの説明は済んでいるので、夕方まででしたら」

「そうか。じゃあ、アコ、ちょっと行くぞ」

「え？ う、うん」

首を傾げつつも、メルさんに行ってきますと告げて、わたしは付いてくるよう促すシュリに従って部屋を出た。

城へ来た時のように、彼の斜め後ろにくっついて歩く。

「あ、あの、隊長殿」

緊張しながら恐る恐る声を掛けると、シュリはちらりと振り向い

た。

「なんだ、もうバレたのか」

「はは、あの、本当に昨日から重ね重ねご無礼を働きまして申し訳もなく」

もしかしたら本当に打ち首とかかも知れないと思い、とりあえず謝ってみる。

「今更だろ」

笑ってそう返してくるシュリに、わたしは内心安堵した。とりあえず、罰則とかの類では無いらしい。

女中さんの宿舎を出て、城内へ戻って。

わたしの記憶が正しければ、どうやらシュリは、城の入り口の方へと向かっているようだった。

「どこに行くの？」

「ああ」

入場した時と同じように門番さんへ軽く挨拶して城門をくぐり、跳ね橋を渡る。

「お前、何も持っていないんだろ。買い物だ」

「買い物って、わたしお金……」

「気にすんな」

「いやそういう訳にもですね」

「買い物させられることもあるだろうから、場所教えんのも兼ねてんだよ」

「……じゃあ、お金は出世払いとして……シュリ」

「何だ」

「親衛隊隊長殿って、暇なの？」

びたり。シュリは足を止めて振り返り、目を眇めてわたしの鼻を軽く摘んだ。

「ふひゃ、あにすんろよ」

「俺は、一応、今日まで休暇なんだよ。暇な訳じゃねーの。判ったか」

「わ、わあったはら、はなひてよ！」

ふん、と息を吐いて、シュリはわたしの鼻を解放して軽く弾いてから手を離す。

全く、低い鼻が更に潰れたらどうしてくれるのか。

わたしは鼻を擦りながら内心毒づいて、すたすたと歩き出した彼の後に再び続いた。

「シュリ」

「何だよ」

「ありがとう」

「おう」

—*—*—*—*—*—

シュリは自分が休暇であつたにも関わらず、城の者がよく利用する店舗を中心に、城下を軽く案内してくれた。

その際、衣類やら生活用品やらも一通り買って貰う。無理矢理出世払いを取り付けたとはいえ流石に気を遣って、必要最低限だけだ。

……勿論、約束の飴は買って貰った。

その後、夕方頃に城へと戻ったわたしは、仕事の早いメルさんが既に直してくれていた女中の制服に着替えて、女中の先輩方と顔合わせ。

皆良い人そうで時間さえあれば色々教えてくれて、翌日から実際に就業して、本日で就業2日目。

ぱたん。

わたしはメモ帳を閉じて、万年筆のようなペンと一緒にポケットにしまい込む。

このメモ帳もペンも、シュリに城下へ連れて行って貰った際に買ったものだ。元の世界で使っていたものよりは紙の質が悪くてざら紙のようだけれど、わたしの観察記録を書き込むのに、紙の質など関係無い。

ちなみに、わたしの人生の必需品のひとつであるポケットサイズのメモ帳に関しては2冊。日記用にノートサイズのものを1冊買って貰った。

メモ帳は1冊が仕事関係のことを書き込む用で、もう1冊が、先にも述べた通り観察記録用。

わたしの密やかな趣味である、人間観察にて収集した情報を書き込む為のものである。

騎士団の宿舎は男の園。

汗臭い。汚い。騒がしい。

綺麗にした傍から汚す。

際どい格好で部屋から飛び出してくる。

酔っ払って絡んでくる。

ちっちゃいちっちゃいわれ撫でくり回される。

それに、食事は調理担当のスタッフが別に居るけれど片付けは女中がするので、洗わなければならない皿の量は半端ではなく、洗濯物の量も然り。水仕事が多いので手も荒れるだろう。実際、年季の入った方の手はガサガサだった。

騎士棟の女中は希望者が少ない、もしくは騎士という単語に夢を抱いて意気込んで来てすぐに幻滅して辞めてしまうという、他の女中さん達の話も頷ける。

まだ就業2日目だけれど、わたしは1日目にして悟った。

何か娯楽でも見つけなければやってられない。

主に、ち……ち、ちっちゃい、という禁じられた単語の連呼に耐

えられない。

そこで、兼ねてからの趣味でもある人間観察という訳である。

わたしの観察記録の事細かさは、元の世界でも、友人に「よくやるわね……」と呆れられたほどだ。そうして収集した情報で、色々と想像するのがまた楽しい。

妄想を実現しようとすれば犯罪者と呼ばれることにもなろうけれど、頭の中に留めておくだけならば自由だ。

あくまで本人に指摘もしないし、気付いた動向を書き留めておくだけで、詮索もしない。

我ながら崇高な趣味である。人に理解されたことは無いけれど。

ちなみに騎士棟は男の園なので、メモ帳の内容は男達の怪しげな動向ばかりになる。妄想も自然、ソッチ系に。

特にソッチ系が好きという訳では無かったけれど、妄想するだけなら、それはそれで楽しいものだ。

そうして観察をしていて、気付いたことがある。

騎士達の動向を窺うかのような、見守るかのような、静かな視線を注ぐ主の存在に。

戦争のような朝食後の後片付けを終えた後、わたしは今日の洗濯物がたつぷりと積まれた大きなカゴを抱えながら第5宿舎内を歩いていた。

朝食後、騎士達は屋外鍛錬や講習会、城下の見回りなどに出掛けてしまうので、宿舎内に騎士の姿は無い。

洗濯物は、カゴを腹の辺りで抱えて前がぎりぎり見えるくらいの量だ。汗臭さが鼻をつく。

ちなみに200名近い若者騎士達の洗濯物の量がこんなカゴ1個

分な訳もなく、屋外の洗濯場と宿舍内の洗濯物置き場を何度か往復しなければならぬので一苦勞である。

と、宿舍から出た辺りで、食指が動く光景に遭遇した。

宿舍の外壁の端に張り付いて身を隠し（こちら側からは丸見えだけれど）、向こう側を息を潜めて窺っている人物を発見。

洗濯物を置いてそっと近付き、その人物が見ているであろう光景を目で追ってみる。

どうやら屋外鍛錬へと向かう途中らしい2名の騎士。片方はハイラムで、彼が緊張気味に話し掛けているのがグリフィスだ。会話の内容までには聞こえないけれど、話し掛けられたグリフィスは気さくな笑顔を返しながら応答している。

遂に勇気を出して声を掛けたのか。内気と鈍感の組み合わせっぽかったので心配していたけれど、良かった良かった。

メモ帳を取り出してペンを走らせながら、わたしはその光景に夢中になっている人物に話し掛ける。

「ハイラムさん、よく勇気を出しましたね。見守る方はハラハラものでしたが」

「そうなのよ。もう、じれったくてじれったくて。グリフィスも鈍感だから視線に全く気付く様子も無いし」

「今朝もじっと見てるだけでしたもんね」

「ほぼ毎朝あんな感じだったのよ。けど、ようやく……って、ええええええええええ！？」

ぴやつ、と肩をそびやかして、その人物……メルさんは驚愕の表情でわたしを見た。

自然に応答していたけれど、わたしの存在にはたった今気付いた様子。それほどまでに夢中になっていたらしい。

赤くなったり青くなったりしているメルさんに、わたしはニヤリと笑みを向けた。

「気付いていましたよ。メルさんが騎士達へ向ける熱い視線に。貴

女……彼らを観察して妄想するのが大好きでしょう！」

びしっと指を突きつけて宣言する。

そう、あれは決して騎士に対する憧れだとか、気になる人がいるだとか、そんな青春的な匂いのする視線では無かった。憧憬で続けられるほど生易しい職場でも無い。

言わばわたしと同種。崇高なる観察趣味の持ち主の眼差し。

自信を持って断言出来る。

メルさんは衝撃を受けてふらりと数歩後退した。

「そ、そんな……来て数日の貴女に見破られるなんて……私……」

「いえ、傍から見ればそれほど判り易くは無いです。わたしが見破ることが出来たのは、恐らく、同類だったからに他なりません」

「ど、同類？」

YES同類。

わたしは真摯な眼差しを、メルさんへと向ける。

彼女はわたしの視線と言葉の意味を一瞬で理解したようで、その表情がきらきらと希望に満ち溢れたものへと変化していった。

わたし達は歩み寄り、がっしりと右手を組んで頷き合う。深い絆が誕生した瞬間であった。

「貴女の観察眼に期待しているわ」

「はい。時々情報交換しましょう」

「勿論よ」

理解も早ければ切り替えも早い。我が盟友に相応しきなかなかの猛者のようだ。

けれども現在は仕事のため、お互いの成果について語り合うべき時では無い。午後の休憩中か、同室なので夜か……機会は沢山あるだろう。

わたし達は気合を込めた視線とジェスチャーでお互いを励まし合い、それぞれの仕事へと戻った。

メルさんは宿舎内の清掃当番で、わたしは洗濯物当番。

基本的にはひとつの宿舎に女中2名しか付けないため、午前中はその2つの業務をそれぞれが受け持つ。広さが広さ、量が量なので、それらの作業をしているだけで午前中はだいたい潰れる。

お昼少し前から昼食の準備を手伝って、昼食時間を切り抜けたら片付け、食堂の清掃。

それが終われば、特に申し付けられている雑用が無ければ夕方まで休憩。

夕方からは洗濯物を取り込んで畳み、湯殿の準備をし、その後は夕食の準備を手伝い、片付け。

女中の1日の業務の流れは、だいたいそんな感じだ。

ちなみに食堂も洗濯場も宿舎ごとに用意されている辺り、人数の多さと広さが判る。

昨日は午後の休憩中、メルさんに騎士棟を中心に城内を色々と案内して貰ったけれど、当然ながら1日そこで把握し切れるような広さでは無かった。

第5宿舎用の洗濯場に備え付けられた大きな桶に洗濯物と洗剤をぶち込み、井戸から汲んだ水を入れる。

洗濯機なんて無いから無論手洗い……もとい踏み洗いだ。

気合を入れてスカート裾を膝上まで捲くって縛り、素足で桶に足を入れる。一通り軽く踏んだだけで汚れが滲み出て水が濁った。

これを何度か繰り返し綺麗にしていくのだけれど、気候も暖かいのでなかなか清々しい気分になれる。

冬場だと厳しそうだけれど、そういえば、そもそもこの国に四季はあるのだろうか。

「頑張っているようだね」

そんなことを考えながら洗濯物を踏み付けていたら、遠くから声を掛けられた。

顔を上げた視界に入ってきたのはくすんだ銀色と緋色。総隊長アルノルトさんとその後ろへと従うシュリが、こちらへと近付いてくる。

通りがかりにたまたまわたしが居たので話し掛けましたという雰囲気。総隊長や親衛隊隊長がこんな場所を通ることもあるのか。わたしは慌てて佇まいを直そうとしたけれど、そのまま良いと促された。

「まだ2日目だがなかなか機敏に動いてくれるので助かると、他の女中諸君も言っているよ。結構なことだ」

「あ、ありがとうございます」

桶の中に立ったまま、わたしはぺこりと頭を下げる。

得意分野を褒められるのは、純粹に嬉しい。

と、わたしの足元へと視線を落としたアルノルトさんが、何故か頬を赤らめた。

恋する乙女のように狼狽してもじもじする総隊長。先程までの厳格な雰囲気は何処へやらである。厳ついおっさんに一体何が起きたのか。

内心ちよっと引いていると、今度はぐりぐりと頭を撫でられた。

「うむ、うむ。この調子で頑張れたまえよ。何か困ったことがあったら私に言うのだぞ」

「は、はあ……」

気が済むまで頭を撫でたアルノルトさんは、はっはっはと笑いながら去っていく。

若干乱れた髪を撫で付けながら、わたしは困惑した。

「えっと……？　どうしたの、総隊長は」

去って行くアルノルトさんを目で追っていた呆れ顔のシュリに話を振ってみる。

「あー……」

半眼の表情はそのまま、シュリは総隊長、わたしの足元、わたしの順に視線を巡らせ、言った。

「あのおっさん、最近色気付いてきた娘に先に風呂に入らないでだの洗濯物を一緒に洗わないでだの散々言われてるみたいだからな。同じ年頃のお前がおっさんの洗濯物洗ってくれてたから、嬉しかったんだろ、多分」

なるほど、この世界にも父と娘の悲しいエピソード的なものは存在するのか。

多分まさに今わたしが踏んでいる下着辺りが総隊長のものだったのだろう。何となくおっさんっぽい柄だし。

何故第5宿舎の洗濯物に総隊長のものが混ざっているのかは謎だけれど、上層の人達の物は当番で各宿舎へ回されるとか何とか女中の誰かが言っていたような気もするし。

「構ってくれない娘とわたしを重ねてしまったのね。ちなみに娘さんって幾つなの」

「じゅうさ、ぶっ！」

言い終える前に、わたしは総隊長のものらしき洗いかけの下着をシュリの顔面に叩き付けた。

そそくさと逃げてしまったシュリに注ぎ切れなかった怒りを洗濯物へとぶつけながら、洗濯を終える。

広い物干し場にずらりと洗濯物が並んだその光景はなかなか壮観で、やり遂げたという充足感もあった。

額の汗を拭い、井戸の近くへと置いたカゴの回収へ向かう。

その時、視界に何か輝くものを捉えた。わたしは眩しさに目を睨める。

きらきらと輝くその正体が人間の髪だという事実気付くのに、少し時間が掛かった。

アルノルトさんの灰色がかったものとは違う、真正正銘の銀髪。その持ち主は井戸の縁に上品に腰を降ろして、穏やかな表情でこちらを見ている。

深い深い紅の瞳と目が合うと、銀髪の持ち主である彼女はにこりと微笑んだ。優しさの中に艶やかさの混じったその笑顔に、同性だというのに心臓がどきりと跳ねる。

ゆつくりと、これまた上品に立ち上がった彼女は、修道女……いわゆるシスターさんを彷彿させる服を纏っていた。

足首まで長さのある質素な黒のローブ。だというのに、女性らしい彼女の身体のラインがはっきりと判って、妙な色気を湛えている。胸も恐らくはわたしより大きくて、女性にしては背も高かった。

そのうえ見たことも無いような美人。女性の理想形と言っても過言では無いとすら思える。

静かに歩みを進める度に揺れる長い銀色の髪は、さらさらと音が聞こえてきそうな程に滑らかだった。

そんな光景に見とれているうちに、彼女はわたしの目の前まで歩み寄ってきて、ぴたりと足を止める。

「初めまして、騎士棟の新入りさん」

微笑んで少し首を傾けた彼女の声は、涼やかで大人の女性的な魅力があつて、彼女の外見に良く合っていた。

壮絶な光景に、心臓のざわめきが収まらない。

「は、初めまして!？」

「わたくしは王国客員魔術師のサリアと申します。貴女のお名前は？」

「あ……亜巳と申します」

「まあ、可愛らしいお名前」

心臓を落ち着かせる努力をしながら答えるわたしに、サリアさんと名乗ったその女性は再びうつとりするような微笑みを浮かべた。

「お見掛けした時から、ご挨拶がしたくて機会を伺っていましたの。宜しければ一緒にお茶でもいかがですか？」

こげな美人がわたしなんかになんかわざわざ挨拶とは、奇特過ぎる。

折角なので一緒に居たかったけれど、生憎ながら、これから昼食の準備手伝いに取り掛からなければならぬ時間だ。

「えっと、ごめんなさい、まだ仕事が……」

まあ、と言ったサリアさんは、非常に残念そうな表情を作る。

「お昼の仕事が終わったら、休憩が取れるかも知れないんです。その時でも良ければっ」

胸を衝いた言い得ぬ罪悪感に、わたしは思わずそう答えていた。

サリアさんは嬉しそうに表情を綻ばせる。

……いちいち心臓に悪い人だ。

「では、その頃にお迎えに伺いますわ。楽しみにしていますので」
そう言って一礼し、サリアさんは何処かへと去っていく。

それを見送ってから、わたしは重ねたカゴを抱えて第5宿舎へと戻っていった。

準備がてら、休憩中にお茶の誘いに乗っても良いかメルさんに聞いてみよう。そんなことを考えながら。

第2話 一 華麗なるへんち……隣人達 【中編】

休憩なんだから好きなように過ごして良いのよ、と、わたしはメルさんからあつさりとお茶会参加への了承を頂いた。

ついでに、謎の美人シスター・サリアさんについて色々と話を聞いてみる。

本人が口にしていた通り、サリアさんは王国客員魔術師。

シュリも言っていた、王国内に数名しか居ないという、魔法というものが使える人物のひとりだという。

この国で言う魔術師とは、その身に内在する魔力を行使して天の声を聞き、吉となる方角、行い、日程などについて助言を行う人物のことを言うのだそうだ。

その他様々な不思議現象を操るそうだけれど、何と言うか、手から炎を出したり天変地異を起こしたりするわたしが想像していたようなものではなくて、昔の日本でいう陰陽師の西洋版的な立場なのかな、と。そんな風に理解する。

アルス・ノーヴァ城内に勤務する客員魔術師は2人居て、その片方がサリアさん。

もうひとりとは男性で、エリアスさんという名らしい。

魔術師と呼ばれる者は、必ず透き通るような銀髪に紅い目という外見的特徴があるため、見ればすぐにそうだと判るとのことだ。

……しかし、益々判らない。何故そのような人物がわたしをお茶に誘うのか。

「うーん、客員魔術師の方とはお話をしたことも無いし、流石に意図までは判らないわねえ」

さりげない観察眼を研ぎ澄ませつつ皿洗いの手も休めないまま、メルさんが言う。

「何か気に触るようなことでもしたんでしょうかね……」

「とても穏やかな方だと聞いているし、そういうことでは無いような気はするけどね」

確かに、サリアさんはとても優しそうな人だった。

皿を拭きながら、少し前に向けられた穏やかながらも魅惑的な笑顔を思い出す。

と、人の姿もまばらになってきた食堂内が、少しざわついた。

残っている騎士達の殆どが顔を赤くして食堂の出入り口付近を注視している。

彼らの視線を一身に浴びているのは、話題の人物、サリアさんだった。

目が合うと、サリアさんはまた穏やかに微笑んで、こちらへ向けて手を振ってくる。わたしは慌ててぺこりと頭を下げた。

視線を浴びながらこちらへと近付いてくるサリアさん。

見た目も綺麗で、物腰も柔らかくて上品で。22歳だというメルさんよりも少し年上に見える、お姉様という言葉がぴったりと嵌る彼女に、若い騎士達が注目するのも良く判る。

彼女は厨房のカウンター越しにわたしの正面に立って、胸元に両手を添えて首を傾けた。

「ごめんなさい、楽しみだったで少し早く来てしまったの。休憩時間はお時間を頂いても大丈夫だったかしら？」

「あ、はいっ！ この片付けが終われば一緒にできます！」

「まあ、良かった。では早く終わるように、微力ながらお手伝いをさせていただきますわね」

そう言って、サリアさんは近くに置いてあった台ふきんを手に取り。それには流石に、わたしだけでなく厨房スタッフのおぼちゃんもメルさんも慌てた。

客員魔術師といえば、親衛隊隊長であるシュリと同格の地位を持つという。そんな人に、拭き掃除などさせられない。

けれど、両手で摘むように台ふきんを持ったサリアさんは、ここ

りと笑った。

「客員魔術師なんて、有事でもなければただの暇人なのよ。少しは有意義な時間の使い方をさせて頂戴？」

有無を言わせぬ笑顔を向けられれば、頷くしかない。

結局、わたし達はサリアさんに昼食後の後片付けを最後まで手伝わせてしまった。

—*—*—*—*—*—

わたしはサリアさんに続いて屋外を歩く。

彼女の勤務地でもある聖堂は、騎士棟と行政棟の間くらいに設置されているとのことだった。特殊な区画というやつのひとつなのだろうと思う。

わたしの前を歩くサリアさんは心なしか軽やかに跳ねるような足取りで、心底嬉しそうに、満面の笑みを湛えていた。

「あの、何故わたしなんかを誘ってくださるのです？」

本気で謎だったので、わたしはストレートに聞いてみる。と、サリアさんは少し振り返って、まあ、と、咎めるような声色で言った。「アコ様、ご自分を貶めてはいけません。アコ様は小さくて、可愛らしくて……わたくしの理想とする人物像がそこにあって、2日前に城内でお見掛けした時から、是非お近付きになりたいと思っていたのです」

小さい、の部分は気になったけれど、そこまで言われると流石に照れる。

背が高くて大人の魅力むんむんなサリアさん。外見的に見ればわたしは彼女と正反対だ。そんな自分には無いものに焦がれるという

心情が、完璧に見えるサリアさんにもあるということなのだろうか。それとも小動物的な目で見ているのか。

どちらにせよ、悪い感情から来るものでは無さそうなので安心した。

彼女に連れられて辿り着いた聖堂前で、わたしは驚愕と感動に口を開いたまま目を瞬く。

目の前にあるのは、各所にステンドグラスがあしらわれた白い綺麗な建物。

正直、もっと質素なものを想像していた。

促されて中へと足を踏み入れ、更に驚愕する。

入って正面の奥には司祭が説教をする台座のようなものがあり、台座を中心に、床には円形の複雑で美しい模様が描かれていて、入り口方向へ向かって、それを邪魔しないように長椅子の座席が幾つか設けられていた。

幻想的なカテドラル。

建物内に照明は無いけれど、台座の背後の壁と天井にもあしらわれたステンドグラス越しに光が差し込んでいて、床を、台座を、屋内の全てをゆらゆらと色とりどりの光が照らしていて。その光景が、何よりも美しかった。

あまりにも現実離れしているので、足を踏み入れることを戸惑うほどに。

「ふふ、気に入って頂けましたか？」

そんな光景にも見事に馴染んでしまうサリアさんに微笑まれて、わたしは口を開けたままこくこくと無言で頷いた。

感動を言葉にしようと試みたけれど、言葉なんて出てこない。

わたしは幻想的な光がたゆたう床を恐る恐る踏みしめながら奥へと進んで、サリアさんに促されるまま、正面から見て台座の左側の壁に位置する質素な木製扉をくぐった。

対照の位置、右側の壁にも同じような扉があったけれど、そちらはもうひとりの客員魔術師さんの部屋に繋がっているらしいが、現在には留守とのこと。

扉の奥の室内は応接室のような場所らしく、ソファとテーブルのほか、最低限の調度品が置かれていた。

更に奥へと続く扉がひとつあり、その先がサリアさんの私室になっているという。

美女の私室というものにも興味はあったけれど、流石にそこまで覗く訳にもいかない。わたしは彼女に勧められたソファへと大人しく腰を降ろした。

サリアさんは上機嫌のまま、静かにお茶の準備をしてくれる。

わたしがやろうと思ったけれど、制されたうえに勝手の判らない他人様の部屋では下手に動くことも出来ず。けれども何となく落ち着かず、そわそわしてしまう。

やがてお茶の準備を終えたサリアさんは、テーブルの上にそれらを並べた。

お茶請けに美味しそうなクッキーまである。

飴も含め甘いものがそこそこ好きなわたしは、思わず表情が緩んだ。

「アコ様は変わった飾りを着けていらっしやいますわね。それは何という飾りなのですか？」

2人掛けのソファが2脚あるというのに何故かわたしの隣へと腰を降ろしたサリアさんが、興味深々といった風にわたしの顔を覗き込んでくる。

飾り……？

疑問に思っただけ彼女の視線を追い、ようやく合点がいった。

「これは“めがね”といって、視力を補正するレンズが入っているものです。わたしは目が悪いので、これが無いと生活もままならないんですよ」

この国の人々をくまなく見た訳では無いけれど、そういえば、めがねを掛けた人物というものを見掛けたことが無い。彼女が疑問を持つ程度には珍しいものなのだろう。

「まあ。手に持って使うものや片目に嵌めるものでしたら知っていますけど、あれと同種かしら？ 外見と実益を兼ねた素晴らしい飾りですね」

めがね、めがね、と口の中で反芻するサリアさん。

この世界のめがね製造技術はあまり進んでいないらしい。下手にその辺に放って無くしたり壊したりしないように気を付けなければ。ここで情報を得られて良かった。

「それにしても、わたくし、アコ様に出会えたことが本当に奇跡のように思っているのですよ。アコ様のような容貌の妹が居ればと、ずっと思いついていたのです」

「妹ですか」

話題を変えたサリアさんは、ええ、と言って微笑む。

「天が遣わしてくださった恩恵に違いありませんわ」

サリアさんは祈るように手を組んで、天を仰いでうっとりとした表情で目を閉じた。

そこまでただならぬ感情を抱いてくれていたとは。

妹が欲しいというくらいだから、サリアさんはひとりっ子なのだろう。かくいうわたしもひとりっ子。サリアさんは美人で、優しくて穏やかで、高位職者であるのに自然に女中の仕事を手伝ってしまふような人格者だ。こんな姉が居たらきつと自慢出来るだろうという気持ちは理解出来る。

そんな人が何故わたしを妹対象としてロックオンしたのかは謎だけれど、この頼りなさげな外見が、面倒見の良さそうな彼女の感性を動かしたのかも知れない。

少々荷が重い気はしたけれど、素直に喜ばせてあげたいなあ、なんて。そう思ったので、わたしは言った。

「サリアさんさえ良ければ、そう思ってくださいっても大丈夫ですよ。」

その……わたしなんかで良ければ」

ぱあっと。サリアさんは神々しいまでの笑顔を浮かべる。

喜んで貰えたのは嬉しいけれど、眩しすぎて直視出来やしない。

「では、早速わたくしのお願いを聞いてくださる？　わたくし、妹と“ぺあるつく”を着るのが夢でしたの」

神々しい笑顔はそのままに、サリアさんはそんなことを口走った。ぺあるつくって……ペアルックですか。

姉妹なんて居ないから気持ちは判らないけれど、姉とは得てして妹にそんな気持ちを抱くもののだろうか。

「ですので、アコ様を一目お見掛けしたその時から、是非着て頂きたくてご用意していましたのよ」

うっとりしながら、サリアさんはどこぞからシスター服らしきものを取り出した。

確かに彼女が着ている質素なローブと似た形だけれど、何ていうか、その。丈がやたら短くないですか。

拒否したい気持ちに駆られたけれど、もはや脅しにすら見える笑顔には逆らえそうも無く。

わたしは若干引き攣った表情でそれを受け取り、どうぞ、と示された物陰で着替える。サリアさんにとっては背後となるその場所からでも、彼女が鼻歌交じりでうきうきと着替え終わるのを待っていることが判った。

手早く着替えてしまい、元着ていた女中の制服を畳む。

しかし、これは……

「き、着替え終わりました、よ……？」

そう言ったわたしの表情は、明らかに引き攣っていただろう。

黒いローブの袖は手首へ向かうにつれてふわりと広がっていて手首が隠れるほどの長さもあるのに、ボディの方はやたらびったりとされていて、丈もおしりが辛うじて隠れる程度とぎりぎりだ。

何より、他の丈に合わせると大概胸が入らないのに、正にわたし用に誂あつちえたかのようにジャストフィット。

見掛けてご用意したとか言っていたけれど、ここまでぴったりだと正直引く。

一見だけでどんだけわたしの身体のサイズ把握してんのこの人。

「まあ、まあ……！」

サリアさんは着替えたわたしを見て、頬を紅潮させ恍惚とした表情を浮かべた。

心なしか息も荒い。ハアハア言っているような気さえする。

いや、実際ハアハア聞こえる。

ハアハア言ってるこの人……！！？

ドン引きして後退しようとしたわたしの頬を、サリアさんはガツと両手で挟んだ。勢いをそのままに、わたしの頬にサリアさんの紅潮した頬をぐりぐりと執拗に擦り付けてくる。

ひい！？

わたしは心の中で悲鳴を上げた。

「ああん、似合うだろうとは思っていましたが！　ここまで可愛らしくかつ如何わしい姿になるなんて思いませんでしたわっ！　あどけない少女にそんなモンを着せているという背徳感が堪りませんわっ！　衝撃ですわっ！」

いやいやいやいやこっちの方が衝撃ですからねこれ。

妹とペアルックとかそんな純粋な気持ちから来るモンじゃないですよねこれ。

自分で用意したものをそんなモンとか言いやがりましたよ確信犯ですか。

なんなのこの人。アレなの。

ロリコンなうえに着せ替えてハアハアする趣味まであるの。

素敵な人だと信じていたのに、とんだ変態じゃねえか。

いやしかし、落ち着け亜己。ロリコンだというならば、わたしの年齢は範疇^{はんちゆう}外の筈だ。

年齢を告げれば萎えてきつと元のサリアさんに戻ってくれる。わたしはそう信じている。

「わたし19歳ですからね。少女時代過ぎてますからね。貴女が着せ替えて喜ぶようなあどけなくて可愛らしいイキモノじゃないですからね」

なるべく感情を抑え単調にそう告げると、サリアさんはぐりぐりしていた頬を離してぱちぱちと目を瞬かせた。

やったか。やったのか。平穩が戻ってくるのか。

そう思っただけで安堵したのも束の間、彼女は殊更恍惚とした表情を浮かべ、のたまった。

「この外見なのに、如何わしいことをしても罪にならない年齢なんて……！ 素敵すぎですわ……っ！！」

駄目だどうしようこの人。

真性だ。真性の変態だ。

天は人に二物を与えずなんて言うけれど、こんな完璧な人に変態属性を付与するとか、あまりにも重い咎を背負わせ過ぎなんじゃないかろうか。色々と与え過ぎなんじゃないかろうか。

何事も過剰なのは良くないと、善良な一般市民であるわたしは訴えたいと思います！

「いやいやそれ本人の同意が無ければ罪になりますからね。犯罪ですからね」

「的確で素早い突っ込み。素敵ですわ！ ちなみにわたくしも性的な意味で突っ込むのが得意なんですけど、体験してみる気はございません？」

「ごいません。全力で遠慮いたします。ていうかあんた突っ込むモン持っていないでしょうが！」

「あら、乙女には秘密の七つ道具がございますのよ？」

真っ青になって牽制しながら後退するわたしに、ハアハアしつつとんでもない発言をぶちかまししながら、サリアさんはにじり寄ってくる。

まずい。非常にまずい。どうしようこれ。こんな所で同性相手に貞操の危機とか酷過ぎやしないですか。

じわじわと後退してカテドラルへ戻る扉へともうすぐ差し掛かるところであった、その時。

どん。

わたしは背中から何かにぶつかり、後退の足を止められた。

退路である扉までもう少しだったというのに、道筋を誤ったのか……けれども壁というにはいささか柔らかい気がする。

涙目のまま振り返って見上げると、そこにあった驚くほど整えられた顔は、俄かに驚きを含んだ表情でわたしを見下ろしていた。

銀糸のような長い銀髪は緩く編まれていて、切れ長の双眸は深い深い紅。長い睫毛がその目許に深みのある翳りを与えている。

ぶつかってきたわたしの肩に手を添えて立っていたのは、サリアさんの男性版のような眉目秀麗な男性だった。

“魔術師と呼ばれる者は、必ず透き通るような銀髪に紅い目という外見的特徴があるため、見ればすぐにそうだと判る”

メルさんが言っていたことを思い出す。

この人が反対側の扉の奥の住人である、もうひとりの客員魔術師か。

「んもう、良いところでしたのに！」

さも憤慨したかのようにそう言って腰に手を当てたサリアさんの

攻勢が止まった。

わ、わたしは助かったのか……!?

帰ってきてくれてありがとう！ 本当にありがとう！ シュリと同格の恩人として認定させていただきます！

確か名前はエリアスさん。

「こちら側が賑やかだったのでつい、ね。それにしても、サリア。幾ら気に入ったからといって、ほどほどにしておかないと嫌われてしまうよ」

苦笑交じりでそう言ったエリアスさんの声は、低めで落ち着いていて、やけに色気のある音色だった。

いえいえ、ご心配には及びませんとも。

もう彼女への評価は下落の一途を辿ってこれ以上落ちようが無いくらい落ちてますから。

「そんなことはありませんわ。アコ様はわたくしの妹になると約束してくださいましたもの」

「そんなもん取り消しに決まっておる！ 貞操が幾つあっても足りやしない！」

「酷いですわ！ わたくしを騙しましたのね！」

「騙されたのはこっちですが!？」

思わずノリツツコミを発動してしまい、はっとする。

わたしは窮地を救って頂いたにも関わらず、背後に立つ彼にお礼の一言すら述べていなかった。

肩に手を置かれたままなので半分振り返りながらだけれど、わたしはエリアスさんの顔を見上げる。

「あ、あの、危ないところを助けて頂き、ありがとうございました」

「……ん？」

微妙な間があってから、エリアスさんは極上の笑みを浮かべて首を傾げた。

……あれ、わたし助けて頂いたんじゃないんですか。

今すぐ性的な意味でわたしにあれこれするのをとりあえず諦めたいらしいサリアさんは、ソファへと腰を降ろし直してすっかり冷めてしまったお茶のカップに口を付ける。

たったそれだけで優雅で神々しくすらある雰囲気醸し出すというのに変態だなんて、何なんでしょうね。

「まあ、スキニシップはおいおいで構いませんわ」

こちらも極上の笑みを浮かべるサリアさん。

おいおいだろうが何だろうがもう貴女とはスキニシップなど図りたくありません。

「今日は準備した衣装を着ていただけましたものね。エリアスの良い仕事のお陰で眼福ですわ」

不穏な台詞を聞いた気がして、わたしは表情を強張らせる。サリアさんは再び恍惚とした表情を浮かべて、更に続けた。

「わたくしは胸の辺りがもう少し小さいと思っていましたけど。貴方の目測でぴったりでしたわね」

「まあね。親衛隊長に連行されている時、随分と腕に乗っていたようだったから」

「流石ですわ」

頭上から、ははは、なんていう甘やかな笑い声が聞こえてくる。

えっと。

わたしの身体のサイズを一見で把握した変態はサリアさんではなくて？

こげないやらしい服を着せられる羽目になった原因は、背後の人物にもあって？

要するにキミたち、グルですか？

嫌な汗が流れるのを感じながら状況把握に努める。

嘘だと言って欲しくて背後の人物を見上げると、わたしの縋るよ

うな視線に気付いたエリ阿斯さんは、にっこりと。それはもうにっこりと微笑んだ。

変態属性は一端隅に追いやるとして、例えるなら、サリアさんの微笑みは天使だ。

柔らかくて、優しくて、穏やかで。性癖さえ知らなければ、誰もが一瞬で彼女に魅了されるだろう。

けれど、エリ阿斯さんが浮かべたのは。

凶悪で、含みがあって、妙な凄艶さがあって。

見た者を戦慄させる、悪魔のような微笑みだった。

目を見続けていたら殺られる気がしたので氣力を振り絞って彼から視線を逸らすと、くす、と、静かな笑い声が降ってくる。

背後に立つ彼の、わたしの肩に置かれていた左手がするすると降りていって、抱え込むように胸の下へと回された。

右手の方は更に下へ。

つつ、とやけに色気のある所作で硬直するわたしの右膝の辺りへと伸ばされ、そこから短いローブの裾の辺りまで、太股をゆっくりと撫で上げられる。

屈み込んだエリ阿斯さんは、背後からわたしの耳に柔らかい唇を寄せ、熱の籠った言葉を吹き込んだ。

「良く似合っているよ……アコ」

ぞわぞわぞわ。

一瞬で全身が粟立つ。

この場に味方なんて居なかった。
早く逃げないと色々と危ない。

幸い、拘束は緩い。

わたしはしゅばっと身を屈めてエリ阿斯さんという名の変態の腕から脱出し、彼が入ってきたお陰で半端に開いていた扉の隙間から

脱出した。

こんな時ばかりは、自分が小柄であったことに感謝さえする。

「一方的に言葉攻めされながら堕ちて行くアコ様だなんて萌えますわあああ」なんていう桃色の叫びが背後から聞こえるけれど、そんなもん無視だ。命には代えられよう筈もない。

わたしは聖堂の出口へ向かって全力で疾走しながら、エリアスさんの恩人認定も全力で取り消した。

ほろり、涙が零れる。

美人なのに、美形なのに。

ふたりとも変態だなんて、神様は残酷過ぎだ。

第2話 一 華麗なるへんち……隣人達 【後編】

「み、右よし……左、よし……」
ゼエハアと肩で息をしながら、わたしは柱の陰に隠れて周囲を窺う。

ここは行政棟の廊下辺りか。
文官達は必要最低限しか室内から出ないため、業務中であろう今の時間帯は、人影も無い。
奴らが追い掛けてきている様子も無いことを確認して、わたしはほっと息を吐いた。

それにしても酷い目に遭った……
まさかサリアさんが変態性癖の捌け口対象としてわたしを見ていたなんて思いもよらない。
一体わたしの何が食指を動かしたのか……めがねか？　めがねなのか？

それに、エリアスさんまで。
サリアさんほどオープンに変態っぽい感じはしなかったけれど、一目でバストサイズ把握したり会って十数分でセクハラかましてきたりする辺り、明らかにアウトだ。

未だ、右耳に唇と吹き込まれた言葉の感触が残っている気がして、耳を押さえてげんなりする。

サリアさんはシスターのような服を着ていたけれど、エリアスさんは牧師というか、そんな雰囲気の良い服を着ていた。勤務場所も聖堂。天の声を聞くとか言っていたし、この国で魔術師とは神聖視されるような立場なのだろうか。

服装などからの勝手な推測だけれど、そうだとすれば、この国の人達は奴らの中身にも目を向けるべきだ。

「あんまり全力で逃げられると、追いつけなくなってしまうな」
ぞわぞわぞわ。

押さえていない方の左耳から、全身に寒気が広がる。
左の耳に吹き込まれた、この無駄に甘くて色気のある声。奴だ。
何で居るの何で背後から近付くの。つい今しがたまで何の気配も
無かったのに！

わたしは後ろを確認もせずに全力でその場から離れた。
けれど、こちらは全力疾走しているというのに、一向に距離は離
れず。奴は一定の距離を保ったままぴたりと背後から付いてくる。
確かにわたしは運動が得意ではないけれど、身長差ゆえのコンパ
スの違いというやつなのか。

憎い、長身の奴等が憎いつつ！！
というかお願いします誰か助けてください！！

と、祈りが通じたのか、前方に人影を発見した。
わたしの必死の形相に驚いたのか、その人物は目が合うと足を止
めてちよつと身を引く。

けれど、真面目そうなこの人ならばきっと助けてくれるに違いな
いというか助けてくれなかったら末代まで祟ってやる！

わたしは渾身の力で猛ダッシュしてその人の背後へと回り込んで
身を隠した。

「変態に追われているんです！ 助けてください！」

「へ、変態……？」

運悪く通り掛ってしまったその人物、ジークベルトさんは、彼の
背中にしがみ付くわたしと前方から近付いてくるエリアスさんを交
互に見て困惑する。

「変態とは心外だなあ」

ははは、と人を欺く爽やかな笑顔を浮かべながら、エリアスさん
はジークベルトさんの少し手前で足を止めた。

「ええと、な、何をしていらっしやったのですか？」

「アコが逃げるのでつい、ね。追いつけていたんだ」

「は、はあ。いつの間にかそのような親密な関係になれていたのですね」

「親密じゃありません。突如降って湧いた変質者なんですその人」

「そんなに照れなくても良いのに。忘れ物を届けようと思っただけなのに、酷いな」

「忘れ物……？」

ジークベルトさんの背中にしがみ付いたまま、わたしはそろりとエリアスさんを覗き見てみる。

彼が手にしていたのは、女中の制服だった。そういえばあまりの状況に着替えてそのまま置き去りにしてきてしまったことを思い出す。

ということは、わたしはコスプレ紛いの色々とギリギリなシスター服のままそこら辺を全力疾走していたのか……か、かなり恥ずかしくなってきた。目撃者が居なければ良いけれど。

何故アコさんの服を、なんて言いながら、ジークベルトさんが顔を赤くしておろおろする。

どんな勘違いをしているのかは知らないけれど、恐らく想像しているような色気のある事情ではありませんですのことよ。

「……す、済みません。ありがとうございます」

忘れ物を届けてくれたのなら、最初からセクハラ紛いの声の掛け方なんてしなければ逃げなかったのに……いや、逃げたか。逃げたな。

なんて思ったけれど、ひとまずは助かったので謝意だけはきちんと述べて。わたしはエリアスさんと目を合わせないように、慎重に前へ出る。

と、受け取ろうと伸ばした手をぐいっと引かれた。

「またおいで、アコ」

ちゅっ、という軽い音が聞こえ、指先に触れた熱が離れていく。

一瞬何が起こったのか判らず、思考が停止していたけれど。
この人、人の指先にキスしやがりましたか？

わたしとジークベルトさんが衝撃のあまり硬直する中、当の本人はひらひらと手を振りながら元来た道に戻っていく。

ぞわぞわぞわぞわ。

時間差で、全身に鳥肌が立った。

何なの。何なのあの捕食者が得物を狙うかのような目付きは。

何でわたしが悉く変態的な存在に目を付けられなきゃいけないの。
やっぱりめがねか？ めがねがいけないのか？

ぎち、ぎち。

何とか硬直が解れてきたわたしは、錆びたロボットのような動きで振り返って、未だ顔が赤いジークベルトさんを見た。誤解だけはせんように釘を刺しておかねばなるまい。

「言っておきますけど、あれは断じてセクハラですからね」

「せ、せくはら？」

「セクハラです。セクハラされたんです。この職場にはセクハラがあるんです！ 人事手続き担当者としてそんな状況を放置して良いんですかー！？」

うわーんと半泣きになりながら、わたしは今度こそジークベルトさんの胸倉を掴み上げていた。

いや、身長差があるので上げるのは無理なのだけれど。

興奮しながら訴えるわたしを放置することは出来なかったらしいジークベルトさんに促され、わたしは城に來た初日に通された事務室のような場所の隣の部屋で、彼に先程の大惨事の話聞いて貰っていた。

文官さん達の休憩室らしく、ソファとテーブルと、お茶を淹れる

道具のようなものが置かれている。

最後まで静かにわたしの話を聞いてくれたジークベルトさんの表情は、若干引き攣っていた。

「そ、そうですか……客員魔術師殿達が。俄かには信じられません
が」

「しかし残念ながら、奴等がわたしに対し変態行為を働いたのは事実であります……」

げんなりした表情で、わたしは呟く。

「私は、第1行政室の室長ではありますが」

ぽつりと言った後、唸るように少し考え込んでから、ジークベルトさんは続けた。

「客員魔術師殿との契約については女王の管轄で、私がどうこう出来るような問題ではなく……力及ばず、申し訳ありません」

心苦しそうな表情を浮かべて、ジークベルトさんは浅く頭を下げる。

わたしは思わずソファから立ち上がって慌てた。

「い、いえっ、こうしてお話を聞いて頂けただけ、で……」

どっと冷や汗が浮き出る。

初めて会った時は必要最低限の会話しかしなかったこともあって、何となく冷たい印象を受けていたけれど。話してみればとても真剣にわたしの訴えを聞いてくれて、自分の権限との兼ね合いで対応できる問題なのか考慮してくれて。

真面目で、恐らくもの凄く良い人だ。

そんな人物に、わたしは。

殺気を叩き付けて目の前で暴れかけて。

胸倉を掴んで揺さぶって。

極めつけに、頭まで下げさせた。

我ながら、何という暴挙の数々であろうか。

急激に申し訳ないという感情ばかりが侵食してきて、ふらふらとソファから離れる。

わたしは床の絨毯が敷かれていない部分に立ち、ジークベルトさんを正面に見据え、這いつくばるようにして土下座した。

「!?!? あ、アコさん!?!?」

「これまでのご無礼と暴挙の数々、本当に申し訳ありませんでした。この通りですのでどうかお許し頂きたい所存であります」

ジークベルトさんが引いているのが判る。けれど、この程度で許されるとは思えない。

だというのに、ジークベルトさんは慌てて駆け寄ってきて、わたしに身体を起こさせた。

「うっ、うっ……どうか、情けなど掛けしないでやっておくんなせえ。貴方様のような方に、あつしはこれまで何てことを……」

「い、いえ、あの。こんなことをされても、逆に困りますので……」
半泣きで訴えてみるけれど、ジークベルトさんはわたしの両脇に手を差し入れて立ち上がらせてくれる。

何故かさつと顔を赤くして慌てて手を離れた彼は、小さく咳払いをして体裁を整えてから、言った。

「兎も角、私に出来ることは限られています、何かあれば相談してください構いませんから。可能なことであれば、上にも掛け合ってみます」

ジークベルトさんの背後から、後光が差しているようにすら見える。

ええ人や。あんたええ人や。

「ありがとうございます……!」

申しわけの無さと感謝の気持ちとがない交ぜになって溢れてきて、わたしは深々と頭を下げる。

ついでに、脳内恩人認定欄に、ジークベルトさんの名前を書き加えた。

—*—*—*—*—*—

その後、2・3会話を交わしてから、ジークベルトさんは仕事へと戻っていった。

どうやら休憩中であつたらしく、貴重な休憩時間を割いてまで話を聞いてくれたことに、殊更謝意を募らせる。

女中さん達から高評価を得ているようなので引き続き頑張ってください、というので、ひとまず自分に出来る女中のお仕事を頑張ろうと思った。

誰も居なくなった休憩室で女中の制服に着替えさせて貰い、わたしは騎士棟に向かって城内の通路を歩く。

如何わしいミニ丈シスター服は一応畳んで持ってきたけれど、どうしようか……返しに行くのも再び貞操の危機に陥りそうなので憚られるし。そもそもわたし用に用意したとか言っていたし。自室のクローゼットにでもそつと封印しておくしか無いだろうか。

そこでふと、今日サリアさんに案内して貰った聖堂までの道筋などをメモ帳に書き加えておこうと思い立ち、わたしは制服のポケットを探った。

メモ帳を取り出す。

あれ、と。違和感に気付いた。

仕事用のメモ帳とペンはある。

けれど、もう一冊の方が。マイソウルメイトが。要するに主に観察した騎士達の様子とちよつとだけ脳内妄想を書き込んである秘密のメモ帳が、無い……！

慌てて反対側のポケットやその他各所をまさぐってみるけれど、どこにも無い。

通路を振り返ってみても落ちていない。

落ち着け、落ち着くのよ亜己。

まずは今日自分が通った道筋を順に探してみよう。

手始めに行政棟の休憩室まで戻って、騎士棟から聖堂までを探して……万が一聖堂内というかサリアさんの応接室なんぞに落ちていたらどうしようか。その場合、命を賭けなければならなくなる。

そもそも誰かに拾われたりなんてしていたら。中を見られたりなんてしていたら。

ひいひい考えただけで恐ろしい……！

「そこの不審な動きをしている貴女。この帳面は、貴女のものかしら？」

通路の真ん中でおろおろうろろしていると、何者かに声を掛けられた。思わず、びくりと肩をそびやかす。

涼やかで、けれども愛らしさの含まれた高潔な女性の声。

振り返ると……そこに立っていたのは、お姫様だった。

綺麗に編まれて結い上げられた長い金糸の髪。髪にあしらわれた上品な飾り。

整えられた、少女らしい愛らしさのある美しい顔の造形。

少し気の強そうなつり気味の目は、蒼と碧のオッドアイ。ふさふさの睫毛。

白くてきめ細やかな肌。細くてしなやかな肢体。それらを彩る、薄紫色の上品なドレス。

そんな同じ人類かと思うような美少女が、片手を腰に当て、もう片方の手に例のブツ……紛れもなくわたしのメモ帳を持って、ずばーんとわたしに向けて突き付けている。

「確かにそれはわたしのものですが……！？」

何でよりもよって貴女のような高貴っぽい方が拾っていらっしゃるのでしょうか。

後半の言葉は飲み込んで答えると、ふうん、と言って、彼女はまだ数ページしか埋まっていなかったそのメモ帳をぺらぺらと捲り、書き込んだ文章に視線を走らせ始めた。

ちよお、何してくれてんですか何プレイなんですかこれは。

だばだばと嫌な汗が大量に流れていく。

ひととおり目を通し終えると、美少女はぱたんとメモ帳を閉じた。

「ちよっと、わたくしと一緒に来て頂けるかしら？」

とびっきりの笑顔と共に放たれる言葉。

うわぁい死刑宣告が来たよ……！

メモ帳を片手で弄びながら上機嫌で歩く美少女に連れられて来たのは、城内でも足を踏み入れたことの無い区域だった。

まだ城に来て3日目なので、大半は足を踏み入れたことが無いんだけれど。

これまで目にしてきたものとは明らかに異なる、繊細な模様や彫刻がなされた高級感の漂う壁や扉、磨き抜かれた床面。

美少女はそのうちのひとつ、深みのある緑青色に金色で模様の描かれた扉の前へと向かう。

扉の前に立っていた衛兵らしき騎士が、美少女にすっと一礼して扉を開いた。

美少女はそれが当然のことのように特に何も言わず扉をくぐったけれど、こちらは妙に萎縮してしまい、通りがけに騎士へ向けてぺこりと頭を下げる。

室内は、それはもう豪華で眩暈がした。

絨毯はふさふさだし、調度品類はもう明らかに王侯貴族とかその辺の人達が使っているような雰囲気や高級感がむんむん漂ってくる。

何より、美少女が入室するなりしなやかに一礼して彼女を迎えた、室内へ控えていた女中さん。所作も洗練されていて、高潔な気配を纏っていて。同じ制服を着ているのに、明らかにわたしとは種類が違う生き物のような気さえする。

一つ、わたしの制服とはリボンの色だけが違っていた。

そういえば担当する棟や仕える人によってリボンを色分けして区別していると、騎士棟の女中さんの誰かが言っていた気がする。

ちなみに、わたしを含め騎士棟の女中のリボンは赤で、室内に控えていた女中のリボンは藤色だ。

美少女が室内の奥、窓際近くに設置されている2人用の小さな卓子へと向かうと、女中さんは自然な所作ですっと彼女の為に椅子を引く。

どうぞ、と進められたので、わたしは座ることを憚られるような高級な椅子を自分で引いて座った。

美少女が女中さんに何かを指示し、女中さんが隣の部屋へと消えていってから、彼女は口を開く。

「貴女、つい先日シュリが連れてきたという方よね。騎士棟の女中として配属されたという」

「は、はい」

「お名前は何と仰るの？」

「亜己と申します」

「そう。わたくしはアルス・ノーヴァ王国女王オルガの第一子、リーゼロッテよ。是非、リーゼと呼んで頂戴」

女王の第一子。じょうさまのお子さん。

要するに、本物のお姫様ですか……！？

嫌な汗の量がどっと増える。

そげな人に、あげなメモ帳の中身をガン見されたと申すのか……！

これは本当に死刑宣告を申し渡されるのかも知れない。わたしは諦観してどこか遠くへと思いを馳せた。

ああ、それなりに充実した人生だったなあ。短い時間だけれど、

別の世界に来てしまうなんていう普通では出来ないような経験も出来たし。

「この帳面だけれど、第一行政室の前辺りに落ちていたのよ」

すっと、リーゼ様はわたしのメモ帳を卓子の上に差し出してくる。早速来ましたか。皆様どうかお元気で……

「左様でございますか」

「今後は落したりしないよう気を付けなければ駄目よ。見付けたのがわたくしで良かったけれど」

「左様でございますね」

「それにしても、貴女、まだ務めて2日だというのにこと細かくて素晴らしい観察内容ですわ。わたくしと同じ趣味の方に出逢えるなんて思ってもみませんでした。特に、わたくし、騎士棟へあまり近付かないよう申し付けられているので騎士棟の殿方達のご様子を知る術がなくて。感動いたしましたわ」

「左様で……はい？」

「司法棟は年配の方ばかりですし、行政棟には若い方もいらっやいますのでそれなりに楽しめるのですけれど、殿方の絶対数で言えば騎士棟の方がやはり何かと想像のし甲斐がありますものね」

「……………」

うつとりとした表情を浮かべて、リーゼ様は言葉を続ける。

メモ帳の中身を見たうえで、同じ趣味。要するに、だ。

「リーゼ様、貴女」

「なんででしょうか？」

「殿方同士のうつふん妄想をするのが好きなのですか」

ふっ、と、リーゼ様は不敵に笑ってみせる。

「大っっっっ好きですわ……!!」

片手で握り拳を作り、リーゼ様は勢い余って立ち上がった。

「わたくしは騎士と言えば親衛隊か隊長格くらいしかきちんとした面識がないので本質は図りかねますけれど積極性に欠ける者の多い文官に比べて彼等の方がより情熱的で親密な関係を築いているように思うのです！ ああ勿論文官は文官で良さがあるのよ？ 静かな内に潜む情熱というか絶対文官の方が責めに回ったらねちっこくていやらしいわ！ けどそんな属性を持ってそうなのは本当少数しかなくて基本内向的で観察してても進展が少ないのよね！ そのぶん武道派の方が芯がまっすぐに瑞々しい反応や動向が期待できそうだし何よりさっきも言ったように絶対数が多いから人の数だけドラマがある筈なのよ！ それなのに近付くことを許されないだなんてこの進む想像力の前に多少の汗臭さなんて障害にすらならないというのに親衛隊や騎士の上層部の奴等が逐一邪魔し……」

立ち上がったまま、リーゼ様はどこで息継ぎしているのかすら不明な勢いで情熱的に語り続ける。

あまりの剣幕に、彼女の背後に具現化した炎とかが見える程だ。アツい。アツすぎる。

彼女の瞳は爛々と輝いていて、ついでに上品なお姫様言葉もはがれ落ちていた。

止めようのない彼女の勢いに気圧されていると、隣の部屋へと行っていた女中さんがティーセットを載せた銀盆を持って戻ってくる。慣れているのか、女中さんは主であろうリーゼ様の様子には眉ひとつ動かさずに、卓子の上に静かにティーセットを降ろした。

「リーゼ様、王女の仮面が剥がれ落ちております」

「だってしょうがないじゃない！ こんな好機に恵まれたのなんて初めてよ！ 興奮もしようというものだわ！」

ぐわっと勢いをつけて詰め寄るリーゼ様にも、女中さんは動じない。

これがプロのお仕事というものか。見習わなくては。

「という訳だから、アコ。今後とも同胞として仲良くして頂戴！」

女中さんの仕事っぷりに感心していると、王女様の興味の矛先がこちらへと向いた。

きらきらと希望に満ち溢れた瞳。表情。

そこまでわたしの観察眼の力が望まれているというのであれば、期待には応えねばなるまい。

正直、大国の第一王女様がいわゆる腐った女子の同胞とかどうなのこの国将来大丈夫なのと思っただけけれど、権力には逆らうべからずなのである。

わたしは出来得る限りのハードボイルドな表情を作って応えた。

「わたしでお力になれるのでしたら、何なりと」

「期待しているわ……！」

わたしとリーゼ様は握手を交わす。これで同胞としての誓いが成立という訳だ。

「騎士棟の女中はこのくらいの時間が休憩なのよね」

「何もないければ、そうですね」

「判ったわ。ふふ、楽しくなりそう」

ゆつたりと腰を降ろし、優雅にティーカップを持ち上げて、リーゼ様は無邪気に笑う。

どうやら、もはやわたしの前で口調などを取り繕う気はなさそうだ。

わたしも倣って腰を降ろし、ティーカップを口に運ぶ。紅褐色のお茶。

初日にシュリが出してくれたものや、城へ来てから休憩中や自室でメルさんが出してくれるものと似た香りのするそれは、色の印象そのまま、飲んでみても紅茶のような味がした。

尤も、香りも味も普段口にするものとは違って、高級感が漂っているけれど。流石は王女様のお茶である。

日本茶や中国茶のようなものはこの世界には無いのだろうか。色々と探してみるのも良いかも知れない。

そんなことを考えていると、コンコン、と、誰かが扉をノックする音が聞こえた。

王女の私室を訪ねるくらいだから、身分の高い人だろうか。

「失礼しますわ」

ブーーーーッ！

リーゼ様に促されて入室してきた人物を見て、わたしは思いつ切り口に含んでいた茶を噴き出した。

輝く銀髪に紅い瞳。羨ましい程に整っていて穏やかな表情を浮かべる顔。モデルさんのような身体に纏うシスター服。

何で、サリアさんが、ここに。

「まあああああ、どうしてアコ様がここにっ！」

ぱあっと表情を輝かせたサリアさんは、リーゼ様には目もくれず、腕を広げ一直線にこちらへと向かってくる。

いやどうしてってそれ聞きたいのはこっちですから！

身を引く暇すら無く、わたしはサリアさんの胸に顔が挟まる勢いで抱き締められた。

「ああん、この胸にすっぽりと収まる小ささ、可愛らしさ！そして柔らかい抱き心地！本っっ当に堪りませんわっ！」

「あら、サリア。貴女、アコと知り合いだったの？」

「ええ、今日お知り合いになりましたの」

挨拶もなく進み出てきたうえに心なしかハアハアいつている気がするサリアさんを咎める様子もなく、リーゼ様は普通に彼女と会話を繰り広げる。

わたしはびくともしないサリアさんの腕の中でじたばたともがいた。

「アコ、サリアもジャンルは違えどわたしと共に切磋琢磨する同胞のひとりなのよ」

“も”ということは、アコ様もわたくし達の同胞になりましたの

？」

「ええ。アコには騎士棟の状況を報告する役目を負って貰うことになったわ」

「まあ素敵。これからはこちらでもアコ様にお会い出来る機会が増えますのね」

視界というか顔面がまるごとサリアさんの胸の谷間に挟まれているため会話にも参加出来ない状況のわたしを差し置いて、不吉な会話が繰り広げられる。

まてまてわたしは自分を付け狙う変態の同胞になった覚えなどないぞ！

「そういえばアコはサリアがいつも言っていた“理想の妹”にぴったりとほまる容姿ね」

「そうなんですの！ んもうわたくし、アコ様を連れてきてくださった親衛隊長様に人生最大の感謝を捧げておりますのよ！」

わたしは下手したらその親衛隊長様を恨みそうです。

不意打ち喰らわせてやっぱり死刑宣告だなんて、流石、崇高な趣味をお持ちの第一王女様ですよハハハ。

いや趣味についてはわたしがとやかく言える立場じゃないし本当は言う気も無いけど！ でも！

流石にこれはあんまりではないでしょうか。

泣くぞ！ 泣くからなああああ！！

わたしはぎゅうぎゅうに抱き込んでくるサリアさんの神秘の谷間から逃れられない分、心の中で思いつ切り絶叫した。

—*—*—*—*—*—

その後数十分。

リーゼ様のこれまでの観察に関する成果の一部と人間関係構想についてのアツい語りを聞きながらサリアさんに視姦されまくったわたしは、リーゼ様の王族の嗜みの講義の時間が迫ったということでしょうやく解放されて、騎士棟内をふらふらと歩いていた。

サリアさんは送っていきまますわなんて言っていたけれど、そんなことをされたら今度こそ微かに残されたライフポイントが0になりそうだったので、そこは全力で拒否。

残念そうにしていたけれど、何か用事があったらしく意外と簡単に引き下がってくれたので助かった。

それにしても、何だろうこの疲労感。何だろうこの絶望感。今日一日で一生分の気力を使い果たしたような気さえする。

わたしは人目も構わず、その場へとへたり込んだ。

人目と言っても女中さんや騎士さんが2・3人視界に見える程度だけれど。この全身に襲い掛かる負の感覚には勝てやしない。

わたしがべったりと床に座り込んで色々なものに打ちひしがれていると、ずっと前方から影が差した。

「何してんだ、お前」

見上げると、そこにあったのはこの世界でわたしが一番見慣れた緋色とオレンジ。

この世界では最も気を許せる筈の存在であるシュリの登場に、通常であればほっとして愚痴でも聞いて貰って慰めてもらったりなんてするところなのだろうけれど。

生憎、今のわたしは負の感情に傾いていて、先程サリアさんが親衛隊長のお陰とか言っていたのを聞いていて、このぶつけどころの無いもやもやを少しでも解消できる方法を探していた。

……要するに、そんなところに現れたら、八つ当たりするに決まっている。

うつ、とわたしは顔を歪ませて両目に涙を浮かべた。

シュリはびくりと一瞬肩をそびやかしてたじろぐ。

「な、何だアコお前どうし……」

差し出された手をぱしっと払いのけて、わたしは自力でふらふらと立ち上がった。

そのまま、きつ、とシュリを下から睨み付ける。

「わたしは……」

どうして良いのか判らずにたじろぐシュリに、わたしは言い放った。

「わたしはシュリのせいで、大切なものを失いましたっっ!!」

シュリは中途半端にこちらへ手を伸ばした格好のまま硬直する。

それもそうだろう、はつきり言ってい掛かりだ。けれどこれは八つ当たりなので、そんなもんは知ったこっちゃない。

「シュリの人でなしにいいいいいい!!」

叫びながら、わたしは全力でその場を走り去った。

ようやく硬直が解けたらしいシュリの「待てお前誤解を招くような発言だけして逃げるなあっ!」などという叫びが遠くから聞こえるけれど、知ったことではない。

その後、親衛隊長は年端もいかない少女が好きだとか親衛隊長が年端もいかない少女に手を出したとかいう噂が城内を駆け巡ることとなった。

第3話 一 大好き。 【前編】

簡単に言葉にすることなど出来ない、絶対的な喪失感。
足りない。

……触れたい。

これまでのわたしの日々を、満たしていたものに。

洗濯用の巨大桶に足を突っ込んだままぼんやりと見上げる空は、
本日も晴天。

聞いた話によると、この国……世界には四季というものがないのだそう。

天候の変化はあるけれど、気温に関しては殆ど無いのだとか。

アルス・ノーヴァは一年中秋晴れのような洗濯日和。日本の四季の風情というものもなかなか気に入っていたけれど、現状洗濯物を担当する身としては、喜ばしいことのように思う。

わたしがこの世界へと来てから20日。

1日の時間の流れが一緒なら、1年や1週間の数え方も殆ど一緒らしく、午前中の主な業務である洗濯と宿舎内掃除は週交代。初め洗濯物担当だったわたしは、その後宿舎清掃を担当して、また洗濯物へと戻ってきた。

洗濯物は使用済みの異性の下着なんかも素足で踏み付けなければならぬという試練があるけれど、宿舎清掃は宿舎清掃で色々と精神的に厳しいものがある。

特に湯殿掃除。

何が悲しくて異性の抜け落ちた様々な部分の毛を処理せねばなら

ぬのか……騎士に憧れを抱いて来た乙女が辞める原因ナンバーワンは明らかにこれだと、宿舎清掃になった初日にわたしは確信した。若者の多い第5宿舎とはいえ、共同の湯殿には毎日結構な量が落ちている。

特に同じ色の頭髮がまとまって落ちているのを見ると悲しい気持ちに……と、抜け毛談義はどうでも良く。

あ、と思い立って、わたしは濡れた手をエプロンで拭ってポケットからメモ帳を取り出した。

今朝目にした若き騎士達の、アコ琴線に触れた動向を、忘れないうちに書き留めておかねばならない。

見てすぐに書き込まないなんて、わたしとしたことがぼんやりし過ぎだ。

今朝も、メルさんに大丈夫かと指摘されたばかりだというのに。反省しなくては。

脳裏に焼き付けておいた観察記録を書き終えて、ぺらぺらと残りのページを捲る。

観察記録用のメモ帳の残りのページは、あと10ページ分ほど。こちらの世界へ来てからの唯一の趣味……リーゼ王女様と出会ってからは殆ど任務とはいえ、我ながら随分とまあ良いペースで埋めたものだ。

そろそろ買わなければならぬか……けれど、月の数え方もほぼ一緒なこの世界では、お給料の支払いも一緒のようで月1回。月末支給のため、だいたい月の頭頃から仕事を始めたわたしの初お給料日はまだ数日後。

メモ帳のページが無くなるのが先か、お給料が先か。

……考えるまでもない。何か代用でも立てるしか無いか。

顎に手を添えて目を閉じ、うんうんと考え込む。

「何か悩み事かね」

声を掛けられたようなので目を開くと、目の前ににこにこと笑う中年、王国騎士隊総隊長・アルノルトさんの顔があった。

驚いて全力で身を引きそうになるのを何とか堪える。

「悩みがあるのなら私に話してごらん」

にこにこ。

さあ早く！ とばかりに期待に満ち溢れた笑みを浮かべているアルノルトさん。

わたしは自分の顔が若干引き攣っているのを感じた。

アルノルトさんは顔を合わせる度に何かとわたしの世話を焼きたがる。

他人様の娘にかまけたくなるほど、実の娘から酷い扱いを受けているのだろうか。若干心配になってしまう。

父親を知らずに育ってきたせいもあって、わたしは一般的に父親というのがどういうものなのか想像出来ないけれど。実の娘と面影を重ねているらしいわたしに対して毎回しつこく同じ台詞を言うくらいなので、娘に頼られるということが嬉しいのかも知れない。

しかし、だ。

いくら何でも騎士の長であるこの人に、貴方の部下達の観察記録と妄想を書き込んでおく用のメモ帳を買ってくださいなんて言える訳が無い。

「と、特にありませんので大丈夫です」

若干引き攣り気味の笑顔を貼り付けて答えれば、アルノルトさんはさも悲しげにしゅんと落ち込んだ。

「本当に無いのかね？」

「ありません」

「……本当に？」

「無いです」

「……ほ」

「しつこいです」

「……な、何かあったらちゃんと言うのだぞ」

更に落ち込んで去っていくアルノルトさん。あまりの落ち込みように、叱られた犬のように垂れる耳と尻尾の幻覚が見えるほど。：中年の厳ついおっさんにそんなものが付いていても、可愛くもなれないけれど。

最近はこのくらい言わないと引き下がってくれないので、多少厳しい口調になるのも仕方が無いと言える。

わたしは小さく息を吐いて、洗濯物を片付けてしまうために足を動かし始めた。

幾つか重ねた洗濯物用のカゴを抱えて、少しだけ回り道をしながら宿舎への帰路に着く。

洗濯場からでも時折微かに聞こえてくる怒号や掛け声に導かれるようにして、いつだったか辿り着いたこの場所。

日中、市中や城内の勤務当番でない騎士達が訓練をするための演習場だ。

この時間帯は2人1組になっての打ち合い訓練をしていることが多くて、今日も然りの様子。

細かい指導は各小隊長なんかが中心になって行っているようだけれど、全体の監督は、隊長格や親衛隊の人間が担当する。

ゆつくりと訓練中の騎士達の間を歩きながら大声で指南をしているのは、見慣れた緋色の髪の主だった。

シュリが大声で騎士達に指示や指摘を飛ばすと、騎士達はそれを真摯に受け入れて訓練に熱を込める。

指導を受けた騎士達の表情を観察していると、シュリの慕われ具合が判るというものだ。

少し気になったので第5宿舎の騎士達に聞き込み調査をしたところ、彼らは親衛隊の面々に分け隔てなく敬意を抱いているけれど、中でも過去最年少で親衛隊長へと抜擢されたシュリには特に心酔し

ているらしい。

剣技の実力だけで言うなら、騎士隊総隊長であるアルノルトさんをも上回るとすら一部では囁かれているそうだ。

確かに。拾って貰った日の翌朝、ひとり訓練していたシュリの姿を思い出す。

あの時の、現実離れた鋭くも綺麗な銀の閃き。全てを射抜く、凄艶な眼差し。

忘れようと思っても、忘れられるものではない。

わたしは改めて、指導を行うシュリの姿を見た。

訓練中はターバンで顔に掛かる前髪を上げていることが多い彼は、真剣な表情も相乗効果を発揮して……正直言って、相当格好良い。

異性だけでなく、嫌味なく同性をも惹き付ける魅力。

勿論それは、彼の外見や剣の実力だけが原因ではないだろうけれど。

と、わたしは別にシュリを見物しに来た訳ではないのだ。

お昼の準備に入る前。洗濯が終わった後に、少し遠回りをしてでもこの場所を通して宿舎へと戻ることが日課になっている、その理由。

堪能する為に目を閉じようとして……横から頭を軽く小突かれて阻止された。

「何すんのよ」

「お前こそ何してんだよ」

見上げれば、不機嫌そうに目を眇めたシュリの顔がある。

訓練中なのにわざわざこんな演習場の端っこまで来てどつくとは。親衛隊長は幼女趣味だという噂が流れたことについて、未だに根に持っているとでも言うのだろうか。

「訓練中は演習場の端っこでも剣とか人とかが飛んでくることがあって危ねえから、あんまり近寄るなって言っただろ」

噂の件では無かったことにほっとしながら記憶を探ると、以前シュリとこの場所で鉢合わせた時に、そんな事を言われたような記憶

が微かにあった。

……けれど。

「仕方ないじゃない、好きなんだもの」

ぽつりと言い返せば、シユリは何度か目を瞬いてから神妙な表情を作る。

「あの中に好きな奴でもいるってのか？」

「そういう色っぽい話じゃないわよ」

変な勘違いをされても困るので、わたしはきっぱりと言い返した。そうしてから、シユリを隔てて後ろにある演習場の風景を見る。

「音」

「……音？」

「そう。音が、好きなの」

目を閉じれば、演習場が奏でる音だけに集中することができた。怒号や掛け声はさておき。

地を蹴る靴音。刃を潰した練習用の剣達が触激した時の高い、低い金属音。剣閃が空気を切り裂く音。

音、音、音。

音楽というには程遠い。耳触りが良いとも言いがたい。けれど、生きた、躍動する音達の共演を一身に感じられる。

わたしにとって演習場とは、そういう場所。

この世界へと来る前、わたしの生活の中には、当たり前のように音楽が満ちていた。

おばあちゃんがピアニストだったので物心つく前からその音を聞いていたし、大学へ入ってからにはより顕著に音楽漬けたと言える。

自分でもそれを望んでいたし、自分の将来もその中にあると信じていた。

それなのに。

この世界へ来た途端、それらがぱったりと失われたのだ。

誇張でも何でもなく。本当に、失われたに等しい状態。

優雅な城内は、様々な芸術に溢れている。けれど、その中に音楽は無かった。

兵隊といえば楽隊というイメージがあるけれど、この世界の騎士隊にはそういう類のものは無く。王族という身分のリーゼ様も、音楽をたしなまない。

調理スタッフのおばちゃん調理中に鼻歌を交えることも無ければ、城内で楽器というものを見掛けることすら無い。

城下を歩くことがあっても、それは同じで。

世界が違うのだから、わたしの中の常識が通用しないことくらいは判るつもりだけれど。

はつきり言って、わたしのここ最近の心此処にあらず状態はそれが原因だった。

来たばかりの頃は混乱していたし、城へ導いて貰ってからは仕事を覚えて生活に慣れることに精一杯で、そこまで気を回す余裕なんて無かったけれど。慣れてしまえば、喪失感を自覚するまでにそう時間は必要無かった。

だから、ほんの僅かな間だけ音の洪水の中に身を置くというささやかなこの行為くらいは、見逃して欲しい。

目を開いて懇願するようにシュリを見上げれば、彼は不思議そうに首を傾げてわたしを見下ろしていた。

視線が合った途端、不自然に目を逸らされたけれど。

お世話になりまくった彼の手を、これ以上わたしのことで煩わせたくな無い。

わたしは軽く首を振って、シュリから視線を外した。

「ま、ちょっと通りすぎるだけだからさ。見逃してよ」

そっと、気付かれないように溜息を吐いて、わたしは第5宿舍への帰路を辿る。

シュリの視線を背中に感じたけれど、振り返りはしなかった。

—*—*—*—*—*—

「いーい眺め」

巨大なアルス・ノーヴァ王城の一角。屋上に備え付けられた、見張り台のようなこの場所。

ここからは、アルス・ノーヴァ城下の広い広い街並が一眸^{いちぼう}できる。騎士棟にこの場所へと続く階段があることに気付いたのはごく最近で、それ以降、休憩時間になると足を運ぶようになった。

穴場なのか、円形に堀に囲まれている以外に何も無いこの場所には、わたしの他に人の姿は無い。

等間隔に凹凸になっている厚い堀のへこんでいる部分にだらりとうつ伏せに身を預け、わたしは溜息を吐いた。
いけない。

最近では、気付くとうとう溜息が出ている。

割と表情や態度に出易いこの自分の性質が憎い。優しい周囲の人々に気を遣わせないように、気を付けなければならないというのに。溜息なんかを吐いているより、城下の素晴らしい眺めに感動している方がよっぽど有意義だ。

そう思って雑貨屋さんはどこかな、なんて探し始めた頃、背後から誰かの足音が聞こえてきた。

穴場じゃなかったのかなんて思っているうちに、やけに慌てた雰囲気はこちらへと駆け寄ってくる足音。直後、誰かに腰を抱えられてぐいっと引かれる。

「うわっ」

わたしは、わたしを引っ張った犯人と一緒に後ろへと倒れ込んだ。

犯人を下敷きにしてしまったので痛くは無かったけれど、一体何事なのか。

上半身を起こして立ち上がろうとしたら、背後から腰へと回された腕にしっかりと捕えられていて無理であることに気付いた。そのため、上半身だけ起こしたまま振り返る。

倒れた時に床にぶつけたのか。後頭部を擦りながらわたしに下敷きにされていたのは、ジークベルトさんだった。

しかし、なにゆえ。

「アコさん、何があったのかは判りかねますが、人生を早まるのはいかがなものかと」

わたしの視線に気付いた彼は、じっと下から視線を合わせて、真剣にそう言うてくる。

わたしは思わず吹き出した。

笑いを堪え肩を揺らすわたしを訝しがりながら、ジークベルトさんはゆっくりと上半身を起こす。

「ご、ごめんなさ……でも、身投げなんてしませんよ。城下を眺めてただけです」

言うのと、彼は一瞬固まった。

そうしてすぐに、自分の早とちりと気付いて羞恥に頬を染め、後頭部を擦りながら短く息を吐く。

「そ、そうですか。しかし、勘違いで良かった」

やけに近くから声が聞こえたので驚いて見ると、すぐ目の前にジークベルトさんの顔があった。

上半身を起こした彼の膝の上に座っている状態なのだから、近くで当たり前か。腕の拘束がもう無いことを確認して、わたしは彼の上から降りて立ち上がる。

「紛らわしくて済みませんでした」

「いえ、こちらこそ、驚かせて申し訳ありません」

彼もわたしに続いて立ち上がると、ばつが悪そうに笑った。

ジークベルトさんは、偶然わたしに助けを求められたあの日以来、顔を合わせる度に何かとわたしの話を聞いてくれている。

その度に変態魔術師達の変態行為について嘆いていたのが悪かったのか。

静かに聞いてくれるのでつい話してしまうけれど、まさか身投げしそうに見られるとは思わなかった。

反省しつつ、堀に寄って城下の風景へと視線を戻す。

「ジークベルトさんは、よくここに来るんですか？」

「いえ、アコさんが上っていくのが見えたので」

わたしに何か用事でもあったのだろうか。

首を傾げて隣まで来たジークベルトさんを見ると、彼は胸元から小さな紙袋を取り出した。

薄くて何の飾りも無いそれを渡されたので、受け取って開いてみる。

中に入っていたのは、愛用しているポケットサイズのメモ帳と同じものが、新品で2冊。

わたしが今最も欲しいもののひとつだ。

「貴女が仕事に使っている帳面が無くなりそうだったでしょう。シユリからの支給品だと聞いたので、給金前で購入資金も無いだろうと思ひまして。支給いたします」

確かに、仕事のメモ用も無くなりそうなのは事実。

けれど、メモ帳を彼の前で取り出したのは、2日前に宿舍の備品購入申請について教えて貰った時のたった1回だけだ。そんな数秒でそこまで見ていたというのか。

観察眼の鋭さに驚くと共に……素直に嬉しい。

「ほ、本当に貰って良いんですか？」

「ええ」

「ありがとうございます……!!」

わたしはメモ帳を胸に抱え、彼に向けて深々と頭を下げた。

うち1冊は確実に趣味用になるけれど、その辺は黙っておこう。

趣味用のメモ帳には専ら王女があやしいと口にするジークベルトさんとシュリのツーショット時の動向についても記録してあって、メルさんにも報告したうえに盛り上がり済だという事実も黙っておこう。

それは置いておくとして、彼は本当に良い人だ。

この20日間で、わたしの中のジークベルトさんの評価は上がりっぱなしである。

「アコ」

上機嫌で顔を上げると、横から声を掛けられた。

穴場な筈なのに、今日は来訪者が多い。

いつの間にか静かに佇んでいたのは、第一王女リーゼ様の専属女中であるジネットさんだった。

涼しげな美貌と肩まで伸ばされたワイン色の髪が、今日も眩しい。

「ジークベルト様、お話し中申し訳ありません。リーゼロッテ様がアコをお呼びです」

事務的な口調で、ジネットさんはそう告げた。

リーゼ様がわたしを交えて同胞会を開きたい時は、自由に動けないリーゼ様の代わりにいつもジネットさんが迎えに来てくれる。

どうやって把握しているのかは知らないけれど、それはもう正確にその時のわたしの現在地点へと。まさかこんな人気の無い所に居ることまで把握されるとは思っていなかったので、内心かなり驚いているのは内緒だ。

……誰にも行き先告げてきて無いんだけどな。

深く考えるのも恐ろしいのでこの辺で止めておく。

きっとそれがプロのお仕事なのだ、うん。

ちなみにジークベルトさんは、散々サリアさんの愚痴を聞いてくれているため、わたしとリーゼ様が懇意にしていることを知っている。

「ジークベルトさん、ごめんなさい。行かないと」

「ええ、気を付けて」

「はい！ 本当にありがとうございます！」

気を付けて、というのはサリアさんに対してという意味なのだろう。

色々な気遣いに感謝して。

もう一度ぺこりと頭を下げてから、わたしはジネットさんと一緒にその場所を後にした。

—*—*—*—*—*—

「あぁっ、あんなに近付いて！ けれども触れることはないあの距離感がじれったいわっ！」

「こう、対象Aの後ろから誰かがぶつかってきて突然触れる機会が、なんていう原始的かつ突発的どつきりイベントでもあれば、一気に距離が縮まりそうなものですけどねえ」

「まあ、アコもそう思う？ 私もそう思っでこうして毎日見守っているけど、なかなか誰も推し量ってくれないのよね！」

握り拳を作って力説するリーゼ様。

一国の王女が毎日出歯亀かよ、と思ったけれど、わたしも人のこととは言えないので口には出さない。

それに、以前、初めてリーゼ様の出歯亀に付き合うことになった時。

あまりのテンションと妄想発言のアツさに“一国の王女がこんなんで大丈夫なのか”という視線を送っていたら、妙に真摯な表情のリーゼ様に「私が駄目でも妹がいるわ」なんて返されたので、もう何も言わないことにしている。

それは兎も角として。

彼女とわたしの視線は、第2行政室のある一点へと注がれていた。机へと着いて一枚の書類を見ながら何事かを話し合う2人の文官。ひとりは椅子に座っていて、もうひとりはその後ろから片腕を机に突くようにして、かなり接近しつつ上から書類を覗いている。

無論、文官2人の性別は両方男だ。

日常にありふれた何でもない光景ではあるけれど、妄想フィルタ―を通せば大層なおかずになるらしい。

「今日もこれでブレッド3斤きんはいけるわっ！」

リーゼ様の決め台詞が発動した。

お米の無いこの世界ではパンが主食。要するに、ごはん3杯はいけるわっ！ の意味になる。

と、握り拳はそのままに揚々と仰っていたリーゼ様が、非常に名残惜しそうな表情を作って溜息をこぼした。

「ああ、まだ見ていたいけど、そろそろ時間だわ。戻らなくては」
曲がりなりにもアルス・ノーヴァの正統なる第一王位継承者である彼女は、教養を高めるために忙しい日々を送っている。

現在はその合間の僅かな休憩時間という訳だ。

そんな貴重な時間をわたしなんかと一緒に過ごして良いのかと思ったこともあるけれど、彼女にとって自分の趣味を理解できる人物に逢えたことがよほど嬉しかったのだろう。

それに、何となく。砕けた口調で話してくれる彼女が、同世代の友人と接しているような気分になさしてくれるので、わたしも嬉しいのだ。

実際は17歳だそうなので、年下なのだけれど。

「では、残念ですが戻りましょうか」

「ええ。アコ、今日もお付き合いありがとうございます」

「いえいえ、楽しませて頂いてますからっ」

ハードボイルドな表情を作り、びしっと親指を立てる。

いつからだったか、リーゼ様も真似て同じジェスチャーを返して

くれるようになった。

美人なので、何をしていても絵になるなあ、なんて。

そんな彼女を見ながら、思う。

わたしは王族の棟にある私室へとリーゼ様を送ってから、彼女の部屋を後にした。

午後の休憩時間中にこうして彼女の元へと通うことも、彼女に会ってからはほぼ日課となっている。お互いの時間が許す範囲で、なので、毎日ではないけれど。

ちなみに、普段はそこにわたしの天敵であるサリアさんが混ざることが多いけれど、昨日から仕事で遠出しているとのことで、今日は遭遇せずに済んだ。

彼女の視姦に対するスルースキルと耐久力も、だいぶ磨かれてきたと思う。

そうしなければわたしの心は生き残っていけなかった。人とは進化するものなのだ。

まあ、今日は磨いたスキルを発揮せずに済みそう。

「だというのに何でこんな所にいらっしやるんでしょうかね……」

「サリアも居ないし、アコが寂しい思いしてるかなと思ってね」

げんなりして言うのと、くすくすと笑いながら無駄に甘い声で答えが返ってきた。

そんな気遣いなんて必要ない。心の底から。

王族の棟を出た辺りの通路の壁に寄り掛かるようにして立っているのは、王国客員魔術師にしてわたしの天敵その2であるエリアスさんだ。

この人もただそこに居るだけで絵になる美貌の持ち主だけれど、

正直わたしは、サリアさんよりこの人の方が苦手である。

サリアさんは全力で逃げれば追ってこないけれど、この人は面白がって追ってくるのだ。

そのうえ実際身体に触れるセクハラ行為を働いてくれるので性質が悪い。

姿を捉えた瞬間に身構えてしまうのも、致し方ないと言える。

……まあ、幾ら構えてもコンパスと瞬発力の違いの所為で、こうして壁際に追い詰められたりとかしちゃうんですけどね！

「えーと……本日はお日柄も良く……」

「アコが洗濯当番の間は今日みたいな天候が続くよ」

「左様でございますか……」

しっかりと両腕の間に挟まれながらも、極力目だけは合わせないようにして逃げ道を探す。

と、壁に貼り付けていた左手をするりと取られた。

手首から手の平を通って指の付け根へと、エリアスさんの長い指が這うように滑る。そうしてわたしの指へと彼の指を絡めるまでの仕草が、やけに色っぽい。

彼はわたしの手を持ち上げると、まじまじと近くで観察し始めた。前科があるためキスされるかも知れないと身構えていたわたしは、若干緊張を解く。

「アコは」

「は、はい？」

「何処から来たんだ？」

わたしは思わずびくりと肩をそびやかした。

この世界の人間ではなさそうだという事実は、シュリには伏せるよう言われている。

「ご、ごめんなさい。記憶が曖昧でして……」

ふうん、と、エリアスさんは短く言っただけでそれ以上の追求はしてこなかった。

納得してくれたのなら指を観察するのを止めていただきたいとい

うかむしろ解放していただきたいのですが。

わたしの手の何が面白いというのだろうか。

身長割には大きいね、とか、指が結構長いね、とか言われたことはあるけれど、ごく普通の手だ。

「それなら、仕方ないな」

ゆらり、唐突といえは唐突に、エリアスさんの視線がわたしの目を捉える。

わたしは馬鹿か。手を見ているだけのようだと油断していた。

深い深い紅の目。

底知れない光を宿してわたしを見るこの目が、苦手だ。

一度捉えられたら全てを暴かれそうで。逃げられなくなりそうで。

……まあ、逃げますけれどもっ!!

しゅぽつと身を屈めて、わたしは脱兎の如くエリアスさんと壁の間から抜け出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5693z/>

アコ様の秘密のメモ帳

2012年1月9日21時57分発行